わかな上

二十

哥と詞と君らをわ

[V.34]

PL 788
.4
.G4
1654
vol. 34
Copy 1
Asian
Japan
Lage

LIBRARY OF CONGRESS

2004551302

源氏卅九より四十一才の春まで也
朱雀院の御門ありしみゆきの後そのころほひより
例ならずなやみわたらせ給ふもとよりあつしく
おはしますうちにこのたびは物こゝろぼそくおぼし
めされて年ごろおこなひのほいふかきをきさい乃（弘徽殿のきさき御事也）
宮のおはしましつるほどはよろづはゞかりきこえ
させ給て今までおぼしとゞこほりけるを猶
そのかたにもよほすにやあらん世にひさしかう
まじき心ちなんするなどの給ひてさるべき御心
まうけどもせさせ給ふ御子は春宮をおき
たてまつりて女宮たち四所（よところ）おはしましけるが（女三ノ母ハ源氏姉とかし）
中に藤つぼときこえしは先帝（せんだい）の源氏にぞ

おりゐましけり。あかご坊（朱雀ノ）とさだめさせしとき
まゐりゐて。女かき（弘徽殿の）くしねまもきびまゐりゐべりし
ひとれ。ごりそてうれうしろさもおりさびで。さく
さくもそのすぢをあつく。御もらあるき更衣（かうい）ぐるまて
御し給ひれば。れまじらひの程ども心ばえそげまて。
大后（弘徽）の内侍（朧月）のかみとまゐらせまつりゐてゐる
りゝはあまぶ人あまくあまてあまし。男（源氏君ノ）給ふどさし給ふ。
けせされて。まうども（朱雀）。れ心の中に。いとおしき
あれまいらせさし。さき給ふげし。おりゐさき給ふし
ばうひあくらちおしくて世中をうしとそか
やうまで。うきを（源氏君）給ふし。まれむしの女三宮と。おまもるの

壬二

れ中にすぐれてかなしきものにおもひかしつききこえ給。その程（朱雀ノ女）御とし十三四ばかりにおはす。いまはとそむきすてやまごもりしなん後の世にたち（女三ノ）とまりてたれをたのむかげにて物し給はんとすらんと。たゞこの御ことをうしろめたくおぼしなげく。西山なる御寺（仁和寺之）つくりはてゝ。うつろはせ（朱ノ）給はんほどの御いそぎをせさせ給ふにそへて。またこの宮（女三）の御もぎのことをおぼしいそがせ給。院（朱ノ）のうちにやむごとなくおぼさるゝ御たから物。御てうどどもをばさらにもいはず。はかなき御あそびものまで。すこしゆへあるかぎりをば。たゞこの御かた（女三）にと

わしてまつくをみて。そのうぜくをみんどとこゝろまいれそうずむどもおりけり。善家もえうられあやまるそへて。ち（紫ノ）紙そむうをうまつべきれころづゝひそりあんとこうをみて。わくらう殿のへりもく女（兼香殿）れもこうひこゝしさをみてまいり給へりずくれこうれおぼしまいしもおかしがりしうど。家（善家）のりくておりしまゝすれすくをのうぶりあくめでさけれど。（紫ノ）こゝろのれ物紙こゝまやうまこゝしうきさき給ひそう。家（善家）もよろげのくとよそとまちゐ給りんれ心づくひあざこゝしきし番給れ（善家ノ）どしの月ごよあをし。ひとよくあしくあびさをみてれうもろこえども

王上三

ふるなる。かなしくしうぬなゝひとりもみ
しふまんべらとうきろやすくせゝくさも給。（等同）式
世ふうしゝのゑうとも給ず。女家ちのあるゝ
のうりさぐまつりきこゑをとひやるなん。さいしゝぬ主
うれまもほぐしなりめべかりけり。さゝさぐひとれ
う人まこゝろしまも。女ハこゝろよりほかにおゑ
あはしく人まおぞしめかゝくすくをあ家るん。
いと口おしくなしさいづれをもせめやうなるゝん
（五文ノ）此世まはさ度ぐつけて此心留（とゞ）めてあほし
ふかくよ。その中なうきろくあるずあなゝし。さうゝる
まもむゆづり給う。（女三）ミ家なんゐうけるときよくひまて

源氏文ニ云テ　朱雀ひとりごと
ごひとりとこれもしらぬとあるじひて、うちすて

ちん後のよる、ごひさ千すんゝと、いとゞうし

ろめくうましく侍と、れめなしのびつゝなく

きこしめし給、女三まもころうけらしら海ぞこそゝし（兼香殿）

つげさせ給。地　されどもさく女三の人よりハまさり給

ときめき給し、これハうりうり給しほどぞれ（源氏文）

あらしひども、えうもしりざりしかば、そなた

あづかりてげなりハげにくとしとハなくとも。

まことの心とゞめてぞひうしろみんとまでハおぼ

さずやとぞなしゝもろうし、おさゆかり（朱ノ）

このみこゝろを悲しあけくれゆくまゝ（女三ノ宮）

れるやこゝましくなとかくなりまさるをめてこそすのとまもいでさ語給はずれもみくけまそどこさくなやまをも給こともありつれど、うとくうちなへをやゝあるさ御はおりしまさずつとびゞれな紋のかぎりなりと覚しめしうれらねとさる世ゝまへれど、なほその世りみこそめでてまうすべかる人ぞは、うまもなうしくめでたきれありさ御を心やすらず恥はまうすまうりて給つぎりは心をやらしておしこゝろみて、六条院（源）よりもれやかゝひせずくありゝけりしも（まゝ）いりすまうすべきことうみ男君（こゝろうめ）て院（紫心）はいとゞいとゞよろこび

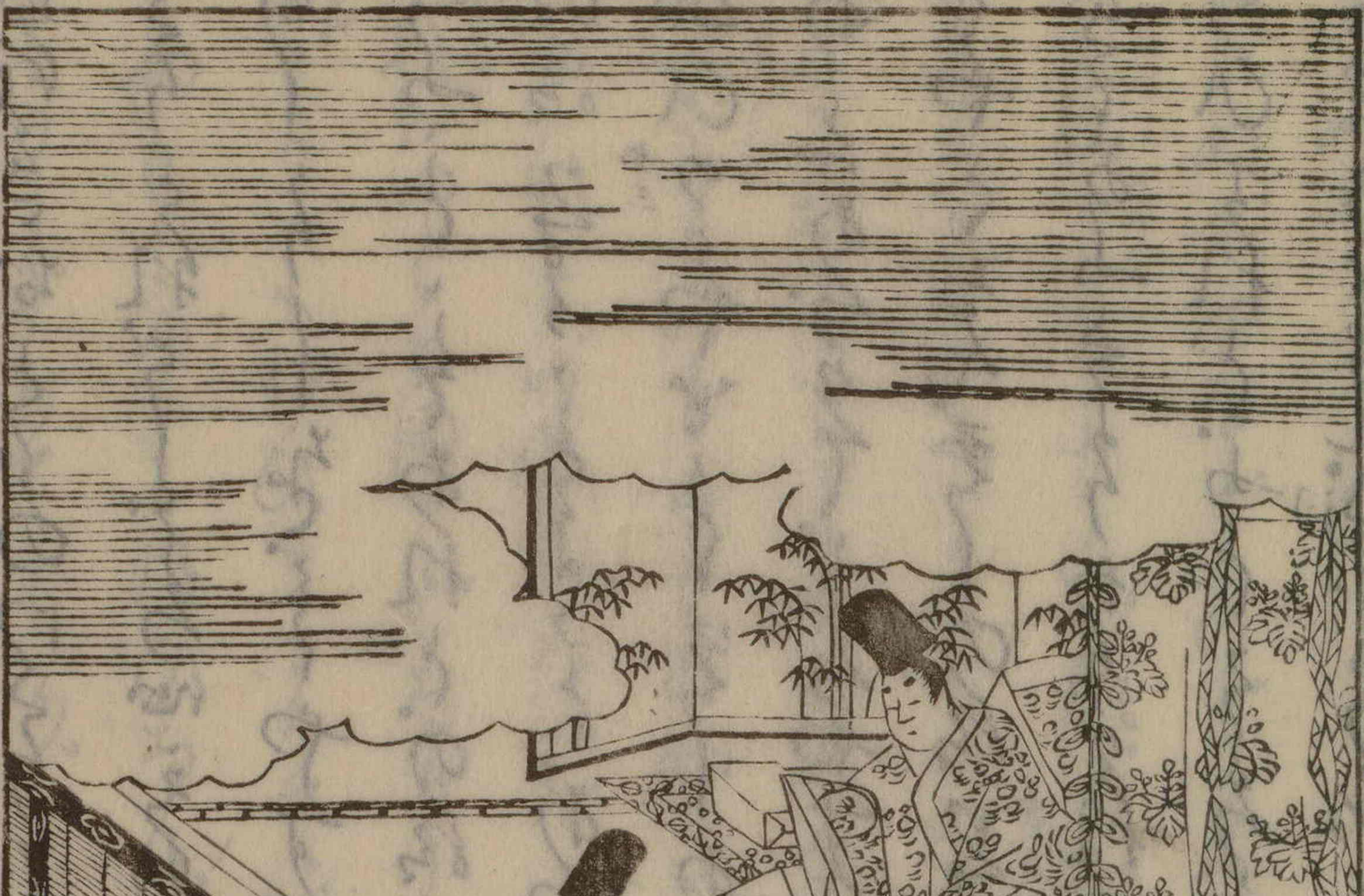
たゝし、さる程、中納言（夕）のきみまゐりあへるを、みす（朱ノ）乃
うちにめしいれて、御ものがたりこまやかなり、故（朱门）
院（桐つぼノ帝）のうへの、いまはのきざみに、あまたの御遺言（ごゆいごん）あ
りし中に、この院（源）の御こと、いまのうち（冷）の御こと
なん、とりわきてのたまひおきしを、おほやけ（朱ノ御位ノ事）と
なりて、ことかぎりありければ、うち〳〵の心よせは
かはらずながら、はかなき（朧月ノ事）ことのあやまりに、こゝろ（深）
をかれたてまつることもありけんとおもふを、としごろ
ことにふれて、そのうらみのこしたまへるけしきを
なんもらし給はぬ、さかしき人といへど、身の
うへになりぬれば、ことたがひて心うごき、かならず

そのむろひこし、ゆゞめうこしあらん。つねしへぶらり
妙ほうりけうゐんありはうぞのれうろぎん
ほころぶべうらんと世人もそもむけうとぞひけるをつね
まふのびきぐしめて。武家ありはも心ざしを見
ねふつまちうきまうあく、そくしうふべき中とあり。
むつびうしおへるもかぞうあくこゝろぞは　あはひ
あうしなどのそろうあのはそへてこのみのやこるは
一　立まどろまう（朱ノ昇下之）くあてふさほまやとて、中（表示あるり）ゝよりその
こくは見しちあちうさほまて待つ。内（冷）のれうしとも
うれ代（相つぎノ帝）れ遺（ゆい）言（ごん）うずへずつうまう垂てしうげ。うく
すゑのうれあきしけさ起きそして、えしうへきれ

おまへがたをもおらうし給はゞいのちのぶるうれしくあらん。
てのわきのびも筆の後。いにしへのことゞりそへて。
ゆかしく覚つゝなくなんおぼしめすらめんは侍る
べきことゞも侍り。なましずげ（源ノ）うしとおもひもの
しうおもふべきうし。おもおぼしめの人などうち
こぼれつゝの給はす。中納言（夕霧）の君すぎ侍りなん
かくやどもうくもおまかせまへわきがく侍りし
まかりへ侍て。おほやけまもつかうまつり侍ありぞ。
世中のことゝうさまへまかりありしかどまいだ大ふの
ことにつけてもうち〳〵のさるべき御ばうらうぜの
けりでまもうまんのこれうしさことありてなん

あげ。（源ノ）うらみすめやしなう御ありも待しきであれん。かく
御ほやけのれうにきよらをつくしてつかうまつりて。さげ
りあうやひをりあへんと。ひとへにこゝろおし
のちは。おほぎさきもちしぬやうにて。故院（きりつぼゐん）の御遺言（ゆいごん）の
ことをもえつかうまつらず。（朱ノ帝）御位をおりさせまし〳〵世
まは。（源ノ）ごきひのほども。かのうつり御もとゝのえず。うし
ゑきさこの人く御はらそ。その心ざしをとげて。御
らんどかくこともあまりき。（朱ノ）今まうりごと紙
さりて。さげうまおりしもの寺御はひ。（源ノ）心のうちをも備（へいぞ）
あらぬまいりうけ給りしまほしうさせ。さすがなり
あまたある事をさ井のまちはひまて。きのけう。

月日をすぐしこしおん。おりくあげなやし給
あど養（えう）し給。二十（タリ）（はたち）（地）まもまぐるかうかはれど。
いとよくく のひすぐして。うちもそうまゝに
ほひて。いさゞくそめしあつなを。（朱ノ）れめまどくめて。
うちまかせしを給つゞれもてワづしうき給姫（女三）宮の。
れうしろうまえれなやあるど。ひとまねど覚え
よろとなるま



（衛門）あはきおとゞのつらう。いまはすきけれは
さりとれ。どうじろ心えぬさ度まことしぐいく
おしかしあさ。こゝやすき抱らしぶずゞまねさく
やふところあれと。の給ひみすかれてこそ。いうま
の給ひすることまうと。あやしくやひめぐしすま。
山ひめこ（女三）やとうく見しおもひて。さるべきひと
あゝばあづそて。ころやすくせなをもおもひきすれ
ばやくちん。見しの給ひすると。なきれけりしもり
きくのふさゝありかれば。さやうのすがまやとは
そひよれど。わところえどもぞ まも ほうちいかん
きうしさなん。（門）くるしくも侍しぬ 老けは

うへもさうひゞくのこゑなんとぞうりぞゝして
やらぬ。女房などはのぞきて見て。いとま難（がく）くも
え給（タマ）へらやうはいかれ。おほめでたかどあつまりて
見ゆるを。おいらくへるは。（老人詞）いでさりとも。かれ院（源）のうへ
かりなおもしきこしれありさまなは。えあるまじく見え
給はざめり。いとめもあやなるこそみなまれし給
しかれど。いひしろかとこそ（来ノ）しめして。（詞）まうとは
（源くん）かれはいとさまことにまうし人ぞうし。いまはまうる
（きみ）まうふかきもわびまかりて。ひかうとはられどうかべき
まやとこゆるにはひあん。いとゞくるしきまるるかな。
まかりいでゝもうかゞしくさかりしきれば。

いけしくおどやかはめをとゞむ心ちすなれど。文うちとけてかはされどもつひにこぼれあそべし。そのことはつけていまつ物あくあらばやうけしきかなしくうつくしきことのかゞびあるさまこそべうはありがたくされおぼごとはもさせば。とそしわれてめづらかなる人の御相あり。家のうちにはとひ出て。てい（桐つぼノ帝）わうのくらゐあくあしき相ましのひ。さはかりあてしづき。身はならへて覚しくらしうど心のうちにはもさだめずひがして。女（えうち）がうちには納言（なふごん）ままあやしげ数はまうしびとつあまりてや。宰相まで大将けのへうぶん。それはこれ（ダ）ものとこはなく

すゝみにためるは。つぎつぎの子のおぼえのまさるな
めりかし。まことにかしこきかたのざえ心もちゐ
などは。これもをさをさおとるまじく。あやまりても
およすけまさりたるおぼえいとことなめりなど
めでさせ給ふ。ひめ宮（女三）のいとうつくしげにて。わかく
なに心なき御有様なるを（朱ノ）見たてまつり給ふにも。（詞）見
はやし奉り。かつはまたかたおひならんことをば
見かくしをしへ聞えつべからんひとのうしろやす
からんにあづけきこえばやなど聞え給ふ。をとなしき
御めのとどもめし出て。（女三ノ）御もぎのほどの事などの給
はするついでに。六条の（源）おとゞの式部卿のみこの女

（紫）むすめ、好子してりんやうまでのこゝ（[illegible]）やをあげ
かりても、ぐゝまん人へまぎれず、人のちゝはいある
がうし。内（冷）は中宮（秋好）をかしこひ、絵、河ぐくの女流達
とても。いとやんごとなきうぞりあれもしゝ。
ちうぐゝきさうきゝおすくて、さやうのまじらひ
いとあすくあしんでの権（夕）中納言の絵所のひざり
ありつゝ猶よぞちうすめてこそ心こゝへうりうれ。
わかれど、いとなやましくは。おもひなれまいしげ
ある人はぞあめるとの給ひす。中納言（めのと詞）（夕）はまくより
いとまあびとまて、宰代も枝（ゐの）（雲ゐ）ゆりは心をうけて
はりゞ殿はさぶらふべくも侍しぞりけるは。

その思ひかなひてはいとゞゆるぐかた侍らじ。かの院（源）こそ中々なほいかなるにつけても人をゆかしくおぼしたる心はたえずものせさせ給ふなれ。その中にもやむごとなき御願ひふかくて・前（先）斎院（さいゐん）（槿ノ斎）などをも・いまにわすれがたくこそきこえ給なれと申して・いで（朱雀）そのふりせぬあだけこそは・いとうしろめたけれとのたまはすれど・げに（源ノ妻ども多）あまたのなかにかゝづらひて・めざましかる（女三ノ）べきおもひはありとも・なほやがておやざまにさだめたるにて・さもやゆづりおききこえましなどもおぼしめすべし・まこと（朱雀）にすこしもよづきておはせんとせん

女子をしへば。おちずくれの人（係）のあつかひこそあれ
かれだくをまほしくれ。いくだくなぬてのよれ
あひぞれはさらり心ゆくあり宿まてこそ。すぐ
宿はしられ。（集）まれ女なるかば。おちずしくろうこあり
ともかるかずむつびよりあるまし。つゝ君時なるど
さるんおぼしまして女のあざむかれんはいと
くりぞやとの給ひて。御（世）心のうちま。（勝）うじの
ゑの御こともおぼしすべし。この御うしろみとゝ
どもなるは。さもくしき御めのとをうと。
左中弁なるか。の院（係）のしたしき人にて。とし
ろつかうまつるなり。このみや（女三）にも心よせことにて

さふらへばま（左中弁ノ）つりごとはあ（ためとノ）ひて執行するけりでは。
（朱）うへ（ためとし同）おほんちかくれ氣色まで見え給しをうれ
（源）院は切りあるべ申し思さをめへ。らてうちゝく
ひさりおりしますこそは例のことあれど。さ每
ざ每まつけてこゝろみきこそまいり。行ずみりつけ
てもれうちかゝし給人あらは。されましげちるま。
（朱）うへと時（とき）そてまいりて。まくゝまごゝろはさひ思めべき
ひともちければ。そのれいつうまいりぞとそも。おほえは
ぞうらの家づへまゝあれんば。心ひとつにしも
おほぞ。そのづゝらひの御（ひ）のこともおりします。
かゞくちき思しもあそんとさまは。らき每う

なほざりしかん。ゐ（朱ノ）んずらんなどおもふくも
このわこさへまうこば。つかうまつりよくあん
あるべきうしろみすぢとこそあれど。さんおかれつと
すくさきさめかくおりしまゝ抽あるれべかろげな
あげしくかくあまるこの御中は。（女三と）さりつきゑて
さも給るつけても。人のそねみあべかめるを。いで
ちりもすへなしとかゝふは。弁（大中納言）いかなるべき
御こまかおん。院（保）はおやしきまで御心あるべく。
かりまでもこそめのへる人は御こゝろとまりかう
せも文さしもかうざりけるをもうぐす
つけて猶さりおもひて。おまへ川どへ宮てかへれど。

やむごとなくおぼしこれはくだりありて。ひとりく（忠ノ分）
あめればそれはことよりて。かひあげなりすまね
ち給ぐくこそハおぼけなかを。れすくをありて。（女三ノ）
まさやうはおりしまみすやうもあつじ。べいこうきさ
（忠）人と男もとも。こちなうこびて。なかしこちゆふことくれ
えおしじとこそハ。そしくつれど。れいうどとぞうう
ふくことありてなんおぼゆう。さうれ此よれさうへぞ
思の世ますぎて。男ま心ましあるさことゐちなる紙。
女のすぢまでなん人のまじらひもおもひ。ワが心やも
おのこともおつとなん。つゝようちくのすさひ
（源ノ）ごとまもおぼしの給ひすつま。げまねそのわくがこ

そまつはも、さかんなりします。うるぐてり
つけそれ、げまくしぬへる人、これら（あるの）人あるず。
さちぐれうきゝれはれまれし給へど、さぶりある
さんどもまで、院（泉）の御ありさ侍はおほすべきさ覚て
がしうやれおもすめつ、それはおほしたは、げま
（廿三ノ）さもおりしまさいかまさぐひかれあるらひあ
らんとかくふさめれとまることのりいでては。
あつくあん、あまり（名れと詞）（九十年ばかり）の歳はほのめかし侍り
しうばかれ院（泉）はれかるさずうけひさやさき給て
しかばの御はいかゞひておぼしぬべきことゝ
ぐらるの御ゆかしまつとはありぬべくゝ

つへこゝえんとちん尸候しをいかゞべくこと
まこれ候ん。ほどくまつけて。ひとれこれく於
ぼしけきまへつ。をがこき心ざ遊まあし給
あれど。こんへざま文くづひ。ざふへこちあこび
ふろことは。人のあはぬことまし候めかを。光ざ遊しき
こしもや候らん。御（女三ノ）うしろミのぞミ給人べは。あまた
拙きつ給めり。よくおぼしめしさだめてこそよく候ふ。
ぬ。かぎりあるき人へと思ゆれどは。まれ世れやうとては。
これほがゝくまおべくしく。世中をれ心とすぐし
おけべきもおはしますべくあるを。ひめ（女三）ミやはあさ
ましくおぼつかなく心許（もと）なくのこしをき給は。

きふ人へゞは。つかうまつりかゞりこそこべし。読。お
かのれ心をきそてまちびことて。さうしこと
しもべもちびきさつふこそ。そふりおうこともれ
待らめ。ぞりそてうかれうちあろこゝあれしくまれ
ざらんは。我ろぽそこき門ぞはちあん待ろんべこしと
ささかし。志（朱羽）つか胡もひ亀どろまよりあん。ここうちの
よづきうろ首雅はうしそあおくしこやうまも
ありまうたききちといへども。女はおとこにむ
家はつけてこそ。やしなふこともめぐ恵しき
されひもさはづかうちまじ家あれちめれど。かれは
かゞしくせひゑぞをさ。まるべきにんありさ

とられて。これむげどもは別めうのち。心なくて
世中は。すぐさんこども。昔い人の心もいつはりて。
よのはゆかさおしき経のことをば。おひなきうぞぬ
袖しるしひとりけん。いまれ世はいすきぐしく。
ゑがりがたしこゝとも。ふいはかれてこゝめり
く。晩目までこゝきおやの家はおがめれ。うし
づれしひとれむすめれ。なかはちかくしくて
ぶれうこゑの。すこゑ袖どもは秋こちおがむうれて。
ちるさおやのおもて。ゑかを。げちをずし。山家ゝ
がひおほくせゆか。いひまてゆけば。これあるゞこく
あり。猶くはつけて。すくをあるどいかゝる。いゑるも

ぐるしきわざなれば、よろづにうしろめたくなん。すべてあしくよくもなるべき人のこころよりゆうしどけうちまかせて世中をすぐすぐしくまで後のよのことおもふ人あるときも、ぶげうしのあやまちるはあるしずありへてこよなきさいはひあるを。めやすきこゝろなるおりは、くてしもあしからざりきとこそあれど、おもとをうちまかせておとをきてつけろる程は、おやよもちかれど、さるべき人もゆるされぬはよろづゝの悪びわざもいでくるなん。女の身はれますしちるにさずすと思ばゆるわざなるちをしくさきこゝ人のちかしいまでぶるは。おそろげく心づきなき

ことわり。かづらの心よりそあらはれて。おのへきまよ
あらぬを。おもふ心よりほかに人にもみえすくをの
猶さへめぐれんなん。いとゞくるしく。わのもく
あしありさま。としころこゝとなるを。（女三ノ）おやこく
まれさるゝきこゝろざまにやとこゝろえなれさま
なるを。（めのとこゝろのうち）それかれの心にまかせてまてあしこそあるか。
さやうなることのよにまりいぞんこといとしうき
ことなりあらじ。（地）みすてまつり給はんのちの給
うしろめたげにおもひ思しさをおもへれぞ。（めのと思入）いとよく
まづしくさひあへり。（詞）いますこし（女三ノ）まれなどもあ
さり給ほどまで。みすぐさんとこそいとしごろねん

どつるを。かくてはいもとげずなりぬべき心ちの
するは。ひまよはされてなん。かれ六条のお（ほ）とゞは
げはさりとももの〻こゝろぞ。うきこゝろやすきハ
こゝはなりなんぞ。かくてありあまたなれさる
べき人ぞ。ざるべきこゝもあらずし。とてもなく
ても人の心うつるなり。のびりは。ゆちおそ。ゆはうらの
これあしども。うつろやすきくは。なくびなく抽
もろく人なり。さしてよろしうべくこひと。かれ
ぢらりなはありかん。苦（嵩）る家人ぞかいめやすし。
おなじすぢそ。へ人とりくまへおやうしむべき
まだあかねど。おまりけくなすびうしめく待ど。

ときこえさせられて。すこしかろびたるおぼえや
すゝみにたらん。猶いとたのもしげなく
なんある。また大納言の朝臣の家つかさのぞむなる（渭ともかし朱ノ別当之女三ノ家司をのぞむといへり）
ことざまはまことにまめやかなるべきことはりはあめ
れど。さすがはいかにぞや。さやうにおしなべたる
きはゝ。なほめざましくなんあるべき。むかしもかう
やうなるえらびには。何ごとも人にことなるおぼえ
あるに。ことよりてこそありけれ。たゞひとへにまた
なくもちゐんかたばかりをかしこきことにおもひ
さだめんは。いとあかずくちおしかるべきわざに
なん。右衛門督（柏ゑもんのこと）のしたにわぶなるよし。尚侍のもの

きれし。その人（柏）ぞ有るらん。らくねなど今すこし
艶めかしきほどまさりなかば。などたはとをもひよりぬ
べき紙。まゐぞしつとつくじげなろびさるほど
ありぶらをさき心ばしふゝて。やまめずゝまそくゑして。
いろくさづありし。さおがわろくしき。ひとはいめけて。
ざえなどもことまさる。うねまはよみくる絵んと
あるべき人なれば。ゆくすゑもたのもしけれど。なぞ又
このさめまじさひそそんはいぐぶりぞおかやと。
よろづはおぼしゝひさり。（地）やうまもおぼし
ちしめおの家さちをばうけても實なやましぬふ
人めるし。おやさくうちくはの緒りすゞ家。れさく

めでたくなれば。そのつゞきとひろごりて心をつく
さへかしはぎなりけり。かしはぎのおとゞもこの衛（柏）門督乃。
今までひとりのこりて。こゝちなずへえで
とかへるを。かゝれさだめども。いでゝなるおりる。
かやうまもをもむけそまつりて。めしよきされ
さんげばかぎりつなぐめよも。めんぼくおりて。
うれしうんと思しの給て。関白のふんのふこと
まいられあるのの物の（以下）ふてまそてつくへ戸給なりなり。
よろづりさりるき云の縁をつくしてそうもふせ。
はかうしき給てしき給。世のかたは（ひげがさ）たちねのいのつ（むぐら）をを
さむしめぐしぬて。（むしノ）ぞこし給んさいらもありがたし

あんこくゐとゑりすぐし給は、いかばれこゝろの（女三ノ宮）
うごくざこん、限（かぎり）なくおぼしいれたり。按大納言（後ニハ中納言　兼ノ別当之）ハ、
年比修（条）のべこうまで、あくしくつかうまつりて。
まひあまれたまへるを、比（兼ノ）山ごもりし給ひんのち。
より前なく心ぼそくなるべきをも、此家のれうこゝろ（女三）なり
ふこゝろて、かくりことをなべくれりしことをもちは
給ひりのよみなるべし、権（タ）中納言もかうこゝひ（ん）くも
ゑく給ふ人々でまもあやざばりともおけさせ
まいりし比（兼ノ）かしこそこそまいりてしけば、比の
づくえぬよりまつけていましまさらめぐみすら
こゝにもあるべくよこをまてもあれてへおもしろしとい

ときめきもきこへざれど。女（によう）ごゝのつまやとうら
とけてこれこそあへるなせ。ざしだつきさまことづけ
はべりし程どは。はぐ海のころもあてずく
てゝぞ。おやまくはいまさしはこちくそりおはいるは
もれぞやゝおもきを見えん。あれめるゝず。やむごと
あすさうるはうづゝひあだ。あすゞともおぼしふまう
あらでぞ。ひざり右（みぎ）はやすくゞず。いはゞ身もくるしく
これはおしめ。もとよりすきくゞしりぬ心あれば。
ちひさげめつうちつぞれど。さすがにほうぞ海は
ぶ（玄）まりきて落りんもげはぞや物しててごゝと
とゞめりまり。妻ゞめはもうこくゞもこゝしめて。

（乳母詞）さしあたりてはいかなれとよりものちの念也
思しともあるべきことなれどよく覚しめし
めぐらすべきことなり。人ゞしらしとてもてく
人はうちざりあつをも。おもとしりしばしらことなるかは。
（乳の）猶（源）六条院にこそ親ざまにゆづり聞えさせ給は
めとなん。けざとみれれをうそこそりはあしかねどれ
そしきありけるを。（乳ノ）まちうきうき給ても（詞）げにさることゝ
ありがたく聞ばしの給はりをとうと。うよくあれ
心ざしをみて。まづかの（左中弁）弁して。そなたぐあない
つたへ聞えさせ給けり。（源へ）この（女三）宮のかくとうく聞しめし
けしき宮は。されどもこれおもきうへれど。

徒司 こゝろぐるしきれゝどなもあるかれ。されはおり
とも。院の此世の始りすくなしとて。こゝまうく
りぐらくすぢぜられそてまうくべきとて。かそのれ
うきろゝのくしをばうけたり界ん。げにまつぐいな
おやもまめまて。いまだむしのほども。のこりとまう
うばさりあしが。おほくまつけていづれの此子ゝ
ちをも。うそてまことをちふそまいるべきも
あはれども。おそくさりわてことゝさなまうらゝ
んをば。ことまことにいうきろここえしめしおのふれを。
それぐるいと不定（ふぢやう）なる世のなぐめなすもやと
のあて。まうしてひとへにこれまれこそまうべくこそ

すらぐむつびなれ聞えしことは中々なうら
づゑゞぞさんこぞゞ心ぐるしく、御つりしの
かゝるもおきりしぬほどしまあんおりべきゞ中納言（夕）
やどれば、さしワくうかくしさやうなすれど、も
さきらをそへ、人ぐしもつねな大やけの、ゆうきろゝ
とも女ぬべきおひさきあめれば、さも覚しよんなるを
などかゝるあらん。されど、いとゞまめだちて、
さゑへさぶらうてぞ、おめれば、それまそぐしきを
なふさや、おしんあどのすゝめて、御づらしいおぼし
もおれろきほちうを、弁（大中弁ム）はおぼろけのさゞめ
まもおしぬをくのゝまへば、つとおしくもち

おしゐをしひてめづらしくになしくらにさう宮
あさましく覚ゆれば。（源）さすがにおちてつゞ（柏）いと
うましくしなり給ふ（女三）にあれば。おかゞちらはうく
としくるもそれのぞりもうつりあかりしか。
くぢ（冷）うちにこそなり給ひめやんごとなきまづの
人ぐおりすといふことゐうしあるさゝとあり。それは
さうらうべきこともおはしまさず。りうゝしずかりとてすゑ
の人をまうくるやうもなし。春宮（桐壺）の御時に。太政大臣（致仕）
おうのそうじめれ女御にてそ。いつきまさせ給しかど。
むげのすゑにまりのへりし。へ（源氏家）后（春つが）家にはおはしし
をされ給ふさうし。この（女三）ゑこての御母女御にてそそ。うみ

（若つゞ）家のならひしうしに地し給けめ。かちもさしつぎ
まは。いとうしといはれ給し人ありしば。いげ
方につけても。このひめみや（女三）。をしなべてのきはには
よろしからじ。さるどうがしくはそひ男すべし。
（地）年も暮ぬ。朱雀院には御心ちなをさるさまを
おはしまさねば。よろづ（来ん）あはたゞしくおぼし立て。
（女三ノ）御もぎのことおぼしいそぐさま。こしかたゆく
さきありがたげなるまで。いつくしくのゝしる。御しつ
らひは。（栢殿朱雀院ニアリ）かへ殿のにしおもてに御帳よりはじめて。
こゝのあやにしきをばまぜさせ給はず。もろこし乃
きさきのかざりをおぼしやりて。うるはしくこと

こゝしく。うやくざうりとくの人さとこまへり。れ
うしゆひなは。お母さおもどせ。うわてより四ましをを（は）
ゆくりされば。とくしゝくおとすひとまて。
まいりまうくおぼしつれど。院（来）のれことをむうし
よりそむさせ給へるにまいり給。今（地）二所の大臣達（左大臣右大臣く）
まゐりの上達部などは。ゆりあさきりあかを。おな
ぢちるゑめしひゑすけつゝまいり給。かんこうら八人。
殿上人などはかずもしらず。うち（冷）春宮も御ゝすゝ所
ひどもひて。いかあしとされいそがれひぐこあまり。院（来）
れゝとはせびこそうちめあれど。春宮（そぐ）をも神ゝて（うちめ）
まゐりて。心ぐるしくおぼしめしつゝ。殿上人なども。おさゝめ

夜のうし物どもおほくなしせ給へり。六条院（源）よりも
御とぶらひいとこちたし。ぞくりあれども。人べ出
禄（ろく）。験者（げんじや）の大徳の御引出物など。院（源）よりぞまうけ給
けり。中宮（秋好）よりも御さうぞくきしのそくて。心ことに
てうぜさせ給て。（秋好斎宮ニ立給ひし時之）それ昔の御ならしあげの具。ゆへあ
る様にあらためかへて。さすがにもとのこゝろばへも
うしなはず。それとこそみて。その日の夕つかたな
さき給。宮（中宮大夫）の権のすけ。院の殿上にさふらふを御使（つかひ）
にて。姫宮（女三）の御方にまいりすべくの給をつれど。
うつりてぞ中にありける
（秋好）さしあかし昔を今につゝれば玉のおぐしぞ

神さびたけり。院にせんじつけておほせられけるはおぼし

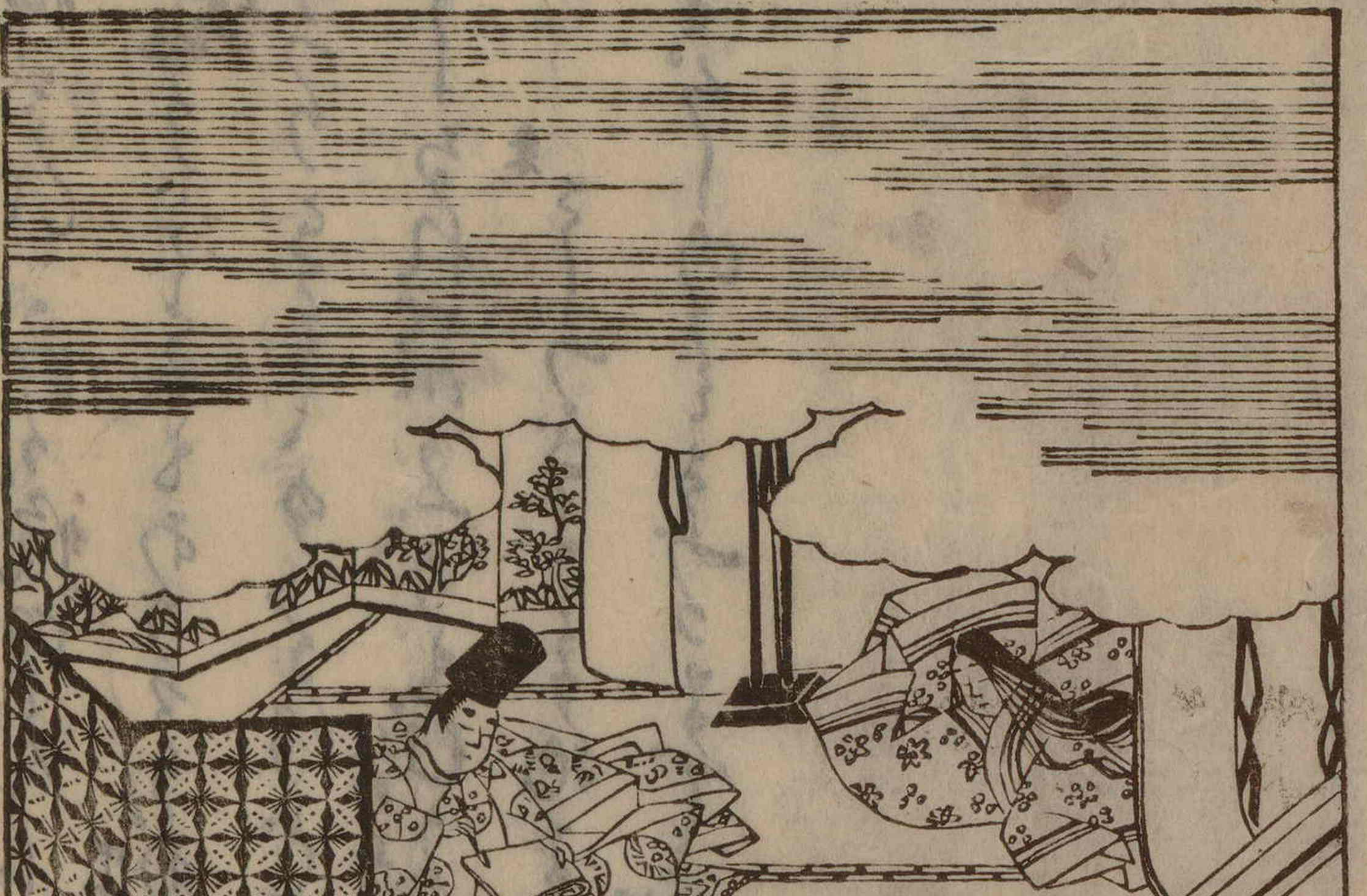
出ゝることどもありありおぼえ御けるはあはれなりと。（中宮のさまあやうの様とぞ）

廿三 ゆづりさゝしのへるほど。げにおもしろくさきさん

ぎしるれば。ねりもむかしの家どもさし垂て（秋好ノ秋宮ニ立給ひけるのさま）

朱 さしつぎたる御なかもがよろづ世をいはずの

きざしのきぶりまで 地 ぞ悦（よろこび）きこえしこゝのへか



は心（念ん）ちいとくるしきをねんじけり。さしばらして
（十三ノまきノ事）このはつそぎもてめれば三日過して。つおはれども
おろし給（地）よろしさ様の人のうへまでぶま。へまは
とて夜ゝうらはうしげあるわざあれば。まして
いと哀げなる。御方ども思ぼしまどふ。内侍（勝）のかむ志
気はつとさふらひて。つゝしく思ぼしけるを。
うしらへ（集ん）見ゐて。子をとなはらぞりありけり。ぐく（勝ノ）
思ものきつゝあつる割（是れ）の。ふんぐくもおあかられそて。
は心こぶれめべかれど。お（地）もひちはれけりそくろ
かりのて。山の座（ざ）主（す）よりはじめて。はいむことのお
さりて三人さふらひて。ほうがあなる様。世給

別(わかれ)のあはれさはう、いふばかりなし、かゝても世をさひ
すまゐしける逍遥(せうえう)あぢきなさ、閑もえらぶめれば、まして
女房たち、女御、更衣ごとの男(をとこ)どんかうえしを
ゆすりこちてあさどもむらは、いとゞ心あさましくしか。
からでもつやかゝる一夜まやゞてこよゐべく思しめのう
けるか、ほいなげにておぼしめさるゝも、みづからこの
おさなきさうなよひりされてとも思しの給ひ付、内より
始(はじめ)なりてけれども、かしこひのまうけさいとさしや、六條院も。
まうしけれ、心ちよろこびて、宇なしをみて、泉のみかれさ
うぢりのみふあぢこそ、これおはすめこそ、おりお乃
なござく久思さまりのくれや、まうしたまひさぶ。

より天皇の儀式(ぎしき)にはかはらせ給はず。それもておはしこひ
ばかりさ夜などは心ことにあれども、さしてはそばさ
めて御めのとくしくめれ車にてまゐりて。
上達部などもさるべき限り車までつかうまつり
ける。院(朱ム)にはいつしか待ち給ひ(まこ)ながらさせ給ひてぐ
なしきれこらをおぼしつるにて対面(たいめん)あり。かう
りしさ夜などすさまじう(朱ノ)おぼしますにはおぼまし
ようひもこえて、いつれなりのあはれをかきよりはべるれ首給
(德ノ)こまり給はさ(ム)しうるともさ紀たさられて、うきし
とどめがたく(汀)おぼさるれど、さぞありもえさめくひ
給はず。(桐帝)御院にはをられなりし此ほどのようなられ

なくさめへてわしりくばこくのはかなくすくさ給ふ

しなど。ころよちくおふなへて、御なことのさ

給ふてづおまくくまそてまつりなし給までさくれ

さそつりめる心のめるさ給。は御しくくまふなへ

ちくくれ。かのさりてはど。こともあるまじき。

思さまへうち給御りくあるをさしくまいと志のべ

ぐまさこそ御はうめべきはづまこそ給けれと

なづさあぐうく御覧しくり院も御心ばそく御覧

さるまえころづよりしず。うち志はされ給は。

つよしへいまれれとれがくりいともげりえて

さきみて御みくおうくし御覧し給は。さえずがり給

へめぐりながらくまゐて・ぶんごはいのちもしりてこそ
とげずありなんとくおもひをこらしてあんかくても
のこりのよはひあすくは・ぞくあひの心ざしもうする
まじけれど・まげりはてゝもゑどあさきて・蓮光（れんこう）を
ぶはとも待ちかね・きこえぐしりくぬかまでと・世ア
あづまくる・ぐぶてのこゝろざし（此出家ノ子）はひさとゞめられ
ほろと・さふかへまいれぬよしもあしぬを・いまゝで
つきあふさきをこえりそぞらば・やすからずなんとて
おばしどもてしかるさ夜あなど・くりしくの結もする
ついでは・女こゝちをあまくうちすて給ひなん・こゝろ
ぐはしこと父（ちゝ）はも・又いゆかりの人あまたさをが・（女三ノ子）こゝろもわさて

うしろめくゝみづゝひ給とて、まほにはおしぬれ
ろしみえど、心（深心）ぐるしとみえてまゐり給、れこゝろの
うちるも、さすゞなるゆうしきれありさ侍あれだ、ね
べしすゞしげくらて、げ（日）なるゝ人よりも、うくう
すぢは、ひたらしざ侍のゆうしろこちすきい、らあり
げなるつざるなん給けり、世ゞめくて、おりしまきば、
いとうしろさきすゑの世のまうけのこと、と、おめれ
しゝそのゝ家にあつぎ思しさすとも、ましてこの
れゝく思しさうをし侍らんとしは、一つゝして、
とおそうなるうろめかなべきことは侍らねば、さして
ゆくすゑのことおぼしあやふべきことも侍らねど

げうこと恨(うらみ)あれば。おほやけとありあひよれきうり
ごとれころはかなふべしとはいひあづらし。女乃れ
さあは。おほまぢかりのけがやかあられ心を。おかべき
なも侍りざりけり。すべて女のゆふあいは。さ海しく
まことのれうまろうことすべきあれば。おちをさかべき
すぢは挨りをうもし。えきしぬことはちぐさこ
ときもられ。まもりめ侍りあんうまろやすりうべき
ことは侍れど。お絵あてのちのうれれうさいひ
のこうべくれ。よろしこさはおぼしえりのて。遊(あそび)て
さりべきれおびりを。さづめそりきあんべこさうはあん
侍りと。養(やう)し給ふ。さや(来门)うはせひよろこし侍れど。

それもうきことはあんなければひとへのくるし
とふて御かはも世をそむきさりのごとくりざは
人をえらひてさうさ海のことをしめへるさぐへ
おほかりまりてくる今いとこの世をさちあり
又はまてごとくそくなすべきまもあるどまる
あらするはまも様ごときことありてざ海ぐるは
きのいづくひ御はどまやちうひをもりゆく又さり
くすべきこともあるめ月日のるもゆけば心おはらく
さくあんりうさいうきことのゆくりなれどこのいそけ
おまき閻魔王（えんわう）ひとり衆（しゆ）うそそもぐこと苦しそさう
べきにすふなもれ心よおぼしきぶめておづけのへ

と男しまはもろ代将中納言などのびきり抱しつゝ
給は。すゞらべくこそありけれ。われはいまうちぶき
こよもんぞしれて。ねく撰し給つとこさえし給。
中納言紀良。まあやうあうるも。うくよく川うう
まうりめぐく給うを給ずもまうもおくくて毎ぐう
すくあくこそ給しめ。うるじけあすくともわうき心
まそ。うもろしこさくしさと給んは。おもしすすれ
くげはうゐりてはあ偶されじなせ。こえもりえ紀こゝじ
うくて。うまうりさすしゝや給んとうくゞけ
しきるるのこあん。こうぐしく給うべゑとぐうけ
ひさし給ふ。夜はへぬれがあうじの院ぐるも。まめしく

（源ノ氏ニノ御こ）これ上臈たちも、これは我（朱ノ）まては、おなしのことく

さうし（精舎ニ）抱まて、うつりしりそはす、おほ度めしく（やさしう）

ありし院（朱）のれまへまちんかうのけぢんは、はまち

あはれ、昔よりそてまつりを、人ゞ洞その御給、叙（あれ）

あかすぢのことにもあれど、うつさけれはりしてくとて、種（源）

かけてえり給、環（わ）ども、つきづきしく給、別当大納言（朱ノ）（女三と宮とある人）も、

れせられまつり給、おなじの院（朱）もせん（ん）よのゆるさす

いとゞはれ風くさつきて、かきこえさりあやましく

おぼさるれど、この宮（女三）の御こと男しきさ、紀川るを

ころやすくおぼしけり。六条院（源ノ）は、なま心ぐるしう

さまぐおぼしこゝろむしきこのことも、うしろめれ

さゞめるじ。それもほのきゝ給へれど。（紫ん）さしもあら
じ。前斎院（槿）（さいゐん）をもねんごろに思給やうありしかど。
わざとしもおぼしとげずなりにしをなど思して
さうゝやあらともとひ思給ずなりぬるをも。
あくておはするは。（源ん）いとおしく。げにとをいまおぼ
さむ。我心ハ宮もうちまじく。さうことおんに
つけてハ中ゝいかゞかさこそまさしめ。（紫ノ）こゝろぐめ
給ハざらん程。つまさひうらびん給ひなどやすからず
おぼさう。今（世）のためしと成ては。ましてかゝる満（で）て
思し給くなく。義あられ中あればいとゞしうかゝるは
隔（へだて）おしゝかくあらんもいづかたを。それ程こそ
（朱より源ノ御心なくて）

うちやすみてあかし給ひて又の日ゆきうちより。その

かしこき御衣ま。こましもりきれの時御紙男え

かくし給。院（朱）（深河）のつるのもしげなくなり給ひしふか。れ

とかくひと參（まう）て衣あつらへものゝまつりれ女三の

宮のれうとせ。させ捧（まて）げけるにおはしてまうくか

んの給ひをはなしりくはべらざりしかくてえさせて

いまひずなりをせ。ことくまくぞ人いつひあるさん

りし。今はさやうのこともうるさくしのも。さ海

ばつくせひあるまうれば。人々てまかりしこきまでを給し

ましは。とかくのがれさせしをさいかんの河いでては。

ばよりきさ海あるこゝろぞものぞくるひいけし

まはえすくもく人さひやきてあらん。みなさ
（朱ノ）御山ずるまうけいろひ給へん様まこそなし。わ（女三と）くし
なしめ。おぢきなくやおぼさんべきいひしらく
おりらもれはあめあるまも。りさくくはさしまあり
まじらひ。ころおほそさなひそま。みれらあらそ心
ぐるしめ。それもうくまてあらずなりてん。
（行れ）まくのどかにて見え給ふなどこそ給ふ。らう
あらされはすさひことどもすゞま。（坐ム）めざましもちまはえて。
（にて）やをうしぬれば心ざし御あれども。うしろおぼさむとお
ぼすまじとつれなくて袋（何）あられゆづりまこそれ
あるれども。まはつらる心を垂なかるべきまう。めざ

ましくゝてはあらじ。とがめらるまじくは心やすく

ても侍らんを。みえきく（源氏文）女のかゝるさへありても。

（紫上女三ハこゝ）うとうとしくおぼしかずまへ。えんやとひがし給せ。

（源詞）あまりかう打とけなれゆるし色。いかなれなるく

うしろめたくこそあれ。よそいさゝかおぼしゆか

しそ。これも人も心みえておぼつかなまでなく

給はゞ。いかゞ哀になん。ひがゞく覚あらん。人の

こと覚ゆれ。なかなか。すべてみな人のうちといふまの

あんらゞいひ出ることえなく。なみれづらし人のあつか

ひあゞうちはてゆかゞ。さらずあることぞなりける

御うみかをゞ心ひとつにきこえめて。おりさ海にもくる

ぐちなんゆゑ・もゞへこがれて・おいなさ納恨し
給なさい・いとよくぞして見給・心のうちもまどく見
ありぞこなはやうなりて・のがれ給うくる
ゑるせ・ぶくげるゝも見てあるしじ・我心はもぶりかのひ
いさむけつゝまさるがひすべき・ぞれがぞちのこゝろ
よりどころわけさまをもおもはず・もろくべき方なき
拙り・おこがましくぞひむすぼゝれさ海・世人
まよりみなしじ・或る文のお目小前・つれてり
うけりしげなるゝゞま紙の給出りし・おぢさなるき
あ歎のれとまでさへ・おやたつく恨（うらみ）こと給ふなるを・
りやうまさて・いつちぞくなひおのを給さん

あぢ。おいらかなる人の御こゝろといへど。いでか
かばかりのくまはなからん。いまはさりともとのみ。
わがみを思ひあがり。うらなくて過しける世のひと
わらへならんことを。したには思ひつゞけ給へど。
いとおいらかにのみもてなし給へり。（源四十歳之地）年もかへりぬ
朱雀院には姫宮（女三）六条院（源）にうつろひ給ん。御いそぎ
をしたまふ。（女三へ）聞え給へる人〻。いとくちおしくおぼし
なげく。（冷）うちにも御心ばへありて聞え給ける程に。
かゝる御さだめをきこしめして。おぼしとまりに
けり。さるはことしぞ（源ノ）よそぢになり給ければ。御賀（グ）乃
こと。おほやけにもきこしめしすぐさず。世中のいと

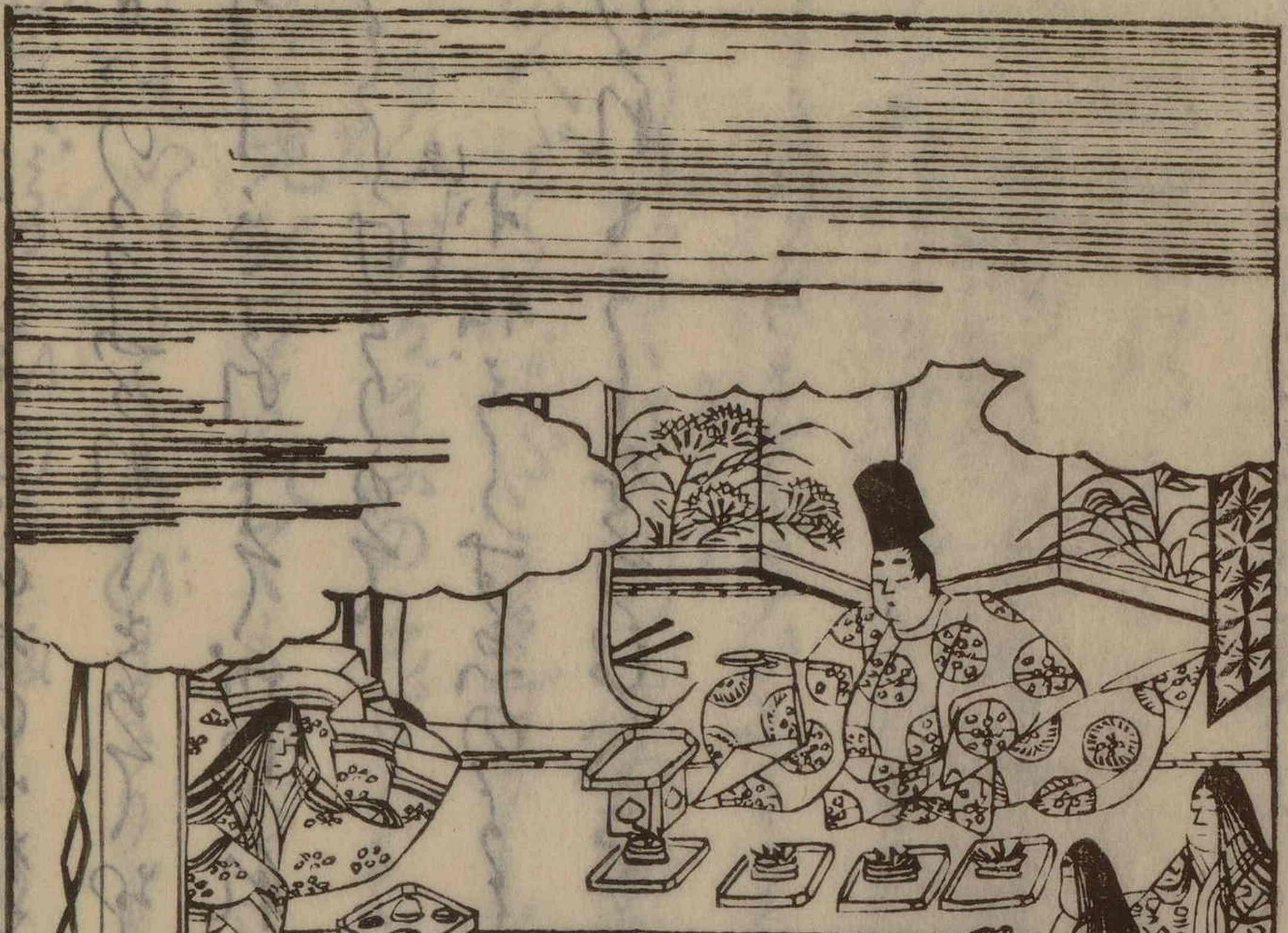
かねてよりひゞくを。ことのわづらひおほくいかめしきことは。昔よりこのみ給はぬ（源ノ）御心にて。これかへさひ申給。正月（むつき）廿三日子の日なりけり。左大将（ひげぐろ）殿の北方（玉）。わかなまいり給。かねてけしきももらし給はで。いといたく忍びて。おぼしまうけたりければ。にはかにて。（源ノ）えいなびあへしきこえ給はで。（玉ノ）しのびかなれど。さぶらふのれいははひなれど。けふの御儀式（ぎしき）など。いとひゞきことゝや。（六条院ノ）みなみのおとゞの西のはなちいでに。おましよそふ。屏風かべしろよりはじめあたらしくはらひしつらはれたり。うるはしくいすなどたてず。御ぢしき四十まい。御しとね

けうそくなどすべてその具ども。うるはしくま
きさせ給へりしさんのにぶしやいろひたり。服衣
だにまうすべて夏冬のはさうぞく。ぐすりごとすりの
しこれすだれも。ゆするつき。うけのしこなどやう乃
物ども。ちゝくさきとつくしまへりけれ。くずしの甚
まはだんきみんをいとり。めでしくきあやめ
なをいとし。おもじきわなをも。なづひなしとう心
ぢんまりうまめしく。ぜんの香物のこゝやびふかく。
かどめきめへる人までめあるれぬさ使りゑる
あへり。大方のことなせど。うとくさりしく
うゝぬ行あり。人ぐまいりなれども。おましく

（源）いで君とそうゞんの君はれ對面（たいめん）あり。れ（源ノ）心のうちには。
つらへおぼし出ることもさ侍らずありけんかし。
いとわくらくまでぞうくれ葉などいふことも。
ひがごとにやとおぼゆるさ侍れ。あまり侍らしく。
人のおやげなくおぼしますをめづらしくぞし
月へだてゝこ御（むノ）わたりものし。いともてなれどれ打
げにやうなるへだてゝもなくて。御物縫ゐかゝり給。
（源左兵衛督・右大弁之）おさなきさ君もいとうつくしくそゝれし給。（む）ゐんの
君はうちつけにも御ぐんざうれしとの給はせ。
大殿の御うつりぞまゐる。御ぐんざきゝんとて。
かくりおほしやうゝおりきけぐさのおほまつひろふるさき

なるべし。すぐどもまでおはすぞうづきみひもこゞ（僧都）
うしの心には。こゝまおもひとゞめしれど。ゐぬ゛着
なずしのわりくさき有様まで。おもしろきことも
なさきを。くらすゑぐのまねしてあん。ぞ候（むノ子たちのまゝ）
ちしこなきまで。さひきしておりも給けり。中納言（女）
のそしうとまうけしあるをせうとしくしくれ（女ノ子ノ事）
まひへずて。あぶくききずし人ようまはぞへ（むノ）
とりすひけり。ゑふの子目こそあ候うれるゑれし
だしは花をはされてもゆべきおなとこそ候。うんの（契）（むぞ）
さゝもいとくのびますり。もいくしくそけん
そひて。ゝうひあうき候しめり

（弘）わか紫き野のへの小松をひきつれてもとの岩ね
をいのりふるれ。しをみておとゞび物し給。ぢん志
ましきまゐりして。わかれさ由ぢきり来わり（源。）虎
きこしけさりめて
（源）卅松ぢうすゑのちまひよひかれてやのへの
わかれもみしをうもへき



[illegible]（源ノ）しめて。上達部あまたみなみ
のひさしにつき給。式部卿宮（紫ノ父公）ハまいりにく
おぼしけれど。御（源ノ）せうそこありけるにかくし
たしき御なからひにて。こゝろあるやうならんも
びんなくて。日たけてぞわたり給へる。大将（ひげ黒）のしたり
がほにて。かゝるなからひにうけばりて物し
給も。げに心やましげなるわざなめれど。むまご（柏木ノ兄弟之）の
君達ハいづかたにつけても。おりたちてざうやく
しのふこもの。よそえだ。おりひつ物。よそぢ。中納言（夕）を
はじめ奉りて。さるべき限とりつゞけ給へり。御かは
らけくだり。若菜（ろうな）の御あつ物まいる。御（源ノ）まへにハぢん

のけぢんよろづかはんつきせどもあらくしく、いまはれ
よろこびほどまをされけり。朱雀院の御ゆづりのこと、
なほ多くつらきなそ給ちぬまでより、具（ぐ）人などはめさず。
御前（すえ）などかはさおとゞ（ない）のかくのとりのへかて、
世中まことの御賀ゞより、又めづらしくきよらをつくす
べきことあるじとのみ思ひて、もぐれうるれの限なせ、
うれてこりおぼしまされば、母びやうり
御あそびありさぐまなみなる、女御（ぞん）ども、うち
おとゞ（ない）の第（だい）一まひし給けれことなり。さるもれく
上（ず）の心なるとゞめて引なし侍べるれば、いとなしび
なきことゞも人にゝきそまくゝしのへば、右衛門督（柏）の

ねざめどゝとへはきさそてまくらしのゝへば犬瀬ッ声の

さくいるぶつをたゝめへもげまつとおもしろく。おさくどとろまじくひく。行ずすもじふ東いりぶきといひわづらくしとえいがぬワざぞうしと。ごろまうく哀ま人ぐ娘ぼし。さうべまさとがひて。おとあつるどもさづまれりまろこしのつへぶも中くさびしきろべきろとおくはあるをごろまりもろしさびうきおとゝろすぐきぐまぎろけのあれくれとのへられころは。さ人まおもしろく。おやしきこまぞひぐくちら。おどくかどもれをもいとゆかうちりてうこうぐしてさうべひぐさ如くおりきてぞうきるしのふ。これをいとワらてうろう。の

ばかれのちすくしく、おりざやうつき多ふ家をとゝと

かうしもはまさらざりしをと、みな人も、おどろき

給。琴（きん）は（蛍）兵部宮ひき給へ、これことは宜陽殿（ぎやうでん）の御物

にて、代々（だいだい）に第（だい）一の名ありし琴（こと）を、故院（桐壺帝）の末（すゑ）つ

かた、一品宮（女四ハ琴好）このみ給ふことにて給はりたりしを

折のきよらをつくし給はんとする故、（源）おとゞの

申給はりける御つたへ〳〵をおぼすに、いとあはれに

昔のことも恋しく思し出らる。（蛍）みこもゑひなきえ

とゞめ給はず。（源ノ）御けしきとりて、ごきんもおまへ（源）に譲（ゆづり）

きこえ給。（源ノ）ものゝあはれにえすぐし給はで、めづらしき

物ひとつばかりひき給ふ。ことごとしからねど、限（かぎり）

地ひらけぞかりひさ絃よしくしうけど思

なく物もえろうき秋の川遊（かはあそび）なりて。さりげれ人〳〵こそ
しほ紛うしてそぐれさら忘のぞりづしして。
くり帰りなるる。秋の空（かけ）りまほ。むかしもへどもと
なつかしくぞろうて。蘭御あそび絃将げまれぞる
の夢驚（ねぶりをおどろかさ）めぐく。いうじく物ろうし。つゝく
ごとの夜はあらしなくて。録（ろく）ならでいとこゑやさくに
まうけられさりし。暁（あかつき）ちかうなれ（む）のきえ入り絃。風（涼ノ）を
くりかへしあそびなるあそびうう（詞）世をすゝるやうにて。
わしらしす侍り。年月のゆくをもしらずがほなる
きごうがぐへしもを海人へりけるにつけて。かゝる
ばてくるん。はずゝの花（あひ）やまされもとめひらく世

よし。かくかねしこ身の末をさしてかまにうつる
ぞひて。あいめるさいとくちおしくなんなど見え
給て。義にもおもしくおもひぞ見え給こと。なりまさる
しもあるを。中〳〵はのこりて。かくいそぎわたり
給ひれど。いとあみずくちおしくぞおぼされけるが。かんむ
虫もまくしの親をかへさん契計にもひ見えあそて。
あぐくうまやかありし此心ぞくとぶし月にそへて。
く世にすこしそて給につけても。ぞうりなうすおもひ
こゝし給ありくて二月の十余日より。菩薩院志
十三姚宮六条院にわたり給。此院もれ心ましけよ
つねならず。われまうしのもあちいでそりし此

帳（ちやう）たてゝ。そなたの一二の對（たい）。わたどのかけて。女房乃局（つぼね）ゝまで。こまかにしつらひみがゝせ給へり。内に参（まいり）給ふ人のさほうをまねびて。彼院（朱）よりも御てうどなどもはこばる。わたり給ふ（女三ノ）ぎしき。いへばさらなり。御おくりに上達部などあまたまいり給。かのけいしのぞみ給し大納言（朱ノ別当）もやすからずおもひながらさぶらひ給ふ。御車よせたる所に。院（源）わたり給て。おろし（女三と）奉り給なども。例にはたがひたることどもなり。たゞ人（源殿臣下ともなきと云）におはすれば。よろづのことかぎりありて。うちまいりにもにず。むこのおほきみといはんにもことたがひて。めづらしき御中のあはひどもになん

三日がほどハかの院（朱）よりもあるじの院（源）がたよりも
いかめしくめづらしきみやびをつくし給。たいの
うへ（紫心）もことにふれてたゞにもおぼされぬ世の有さま
なり。げにかゝるにつけてこよなく人におとり
けたるゝこともあるまじけれど。またならぶ人なく
ならひ給ひて。はなやか（女三ノ）におひさき遠く。あなづりに
くきさまにてうつろひ給へるに。な（紫ノ）まはした
なくおぼさるれど。つれなくのみもてなして御
わたりのほども。もろ（源と紫ノ）心にはかなきこともしいでて。
いとらうたげなる御有さまを。いとゞ（源ノ）ありがたしと
おもひきこえ給。姫宮（女三）ハげにまだいとちひさく。

かたなりにおはするうちにもいといはけなきけしき
してひたみちにわかびたまへり。かの（源心）（紫上の事）むらさきのゆかり
たづねとりたまへりしおりおぼし出るに。（紫）かれは
ざれていふかひありしを。（女三）これはいといはけなく
のみみえ給へば。よかめり。にくげにおしたちたる
ことなどは。あるまじかめりとおぼすものから。いと
あまりものゝはえなき御さまかなと見奉り給。三日が
程は夜がれなくわたり給を。（紫心）としごろさもならひ給
はぬこゝちに。忍ぶれど猶もの哀なり。御ぞどもなど
いよゝたきしめさせ給ものから。打ながめて物し
給ふけしき。いみじくらうたげにをかし。（源心）などて

よろづのことおもひまさん人とばかりにてこゝろうべきぞ.
おぼしゝく心.えたるありさまつがをこ
くるしうこともいでくまじ.さうけれど中（夕）
納言をばえおぼしけずありめありしをとく.我
ちゞつくしおぼしけるは.涙ぐまれて.
（源氏）と秋ぞかいことゝいりとゆかし給てんか.これより
後のとぶえおんこそ.男ずゝも心げさなかゝん
それ.まことそ故院（朱雀）にきこしめさんことゝ.
さひろぶれのすぐる心のうちくるしげなり.（紫）すこし
ほゝゑみて.（源）ぶつしの心ありしぶかりえなぐめ給
ましるうなぞ.まして ことわりもあるまいにける

とまるべきにかといふかひなげにとりなし給へば（王難）
恥（はづ）かしうさへおぼえ給て。つらづえをつきてより
ふし給へれ。御硯（紫ノ）を引よせて
（紫ノ）めにちかくうつればかはる世中を行末
とをく頼（たのみ）けるかな。ふることなど書まぜ給を。（源）とりて
見給て。はかなきことなれど。げにとことわりにて
（源）命こそたゆとも絶（たえ）めさだめなき世のつねならぬ
（なか）中の契（ちぎり）を。とみにもえわたり給はぬを。（紫詞）いとかたはら
いたきわざかなと。そゝのかしきこえ給へば（源）なよゝか
をかしき程に。えならずにほひて（女三へ）わたり給を。（紫ノ）見いだ
し給ふも。いとたゞにはあらずかし。年（槿ちどのめうすく）さもや

おんとおもひしかども。今まてのとまてながらあれ
給つ。さしづかうまつてちとうちとけゆくするには。
ありしてうき世のなかうも。なすみめすしぬこと
のいでかめるよ。おもひさぶしんべき世の有さまにもあ
らざりければ。今より後もうきろめくうぞ覚しなり
ぬる。さしそつれなくまぶしりのへど。さかしふ
人ぐも（人ゝ旧）。おもはずなる世なりや。（女中衆ノ）おましき地しかまふ
やうなれど。いづるもこれ（[illegible]）となるのれけなひはふ
うきりけばかる海まてわうしくまへばこそこと
あくなまぶらるまもあれぞしらそゐずかりなる
有さまにけなれてもえるし給ひざきくさりとてく

あさましきにつけてもやすからぬことのおほかれどおほしおり。心ぐるしきことゞもだにぞてまゐらんうしろめたく。どのがざうちかたらひあげしげなるつゝみを。（紫ノ詞）あはれこそ見えぬやうなとけしきひおもしく物給ふなるし給つ。表おくまでおりすぐす人のつゞあゝずいひそひころも。ことにうしとおぼして。うくこそあれ（詞）あまりまれし給めれど。（源ノ）こゝろよくおもひて。いまめしよすれこゝはまたあらずとめなれて。さりげなくおぼしうつりまごこのころや（女三）まいうくわりなくへだてそめやすくなれ。あながちにわかごゝろのうちをぬまやあらん。われも（紫ノ女三ニ）むつびきこえてあらまほし給。

あいなうへくそてあかさ候は。人々やさりなすらんと
すゝん。ひとしほ程おさまり候ほどむ人まゝしそうて
わゝずこゝろこども。それづゝりそてうワざあれ。
さうげなく心ぐるしきれことなめれば。うゝて
心ぞれなしとなんきゝなどのくまへば（源ノおほむ人）中務
比中将のきみなどやうの人々ば。めそくまかせいゝ。あまり
あるれもひやうきなゝどいふべし。昔（紫ノ）はしうなまゝお
さ候はつ（源ノ）ひなし給しき人（中務中将などこそ）どもおすれどさし
ばかりはれ方（紫）はさふしもて。これ心よもやれしるあめり。
（源ノ香ー元）こゝれうぐしなりも。（紫ノ）いくの物ばすゝん。もとより
うひさあれさう人々は。中しころやすきをなど

すゑもけつゞとかくしひきかへて縁もありながら（ゆゑん）くらし
まろ人こそ中々にうしられ。世中もいとつね
あさきもみれなき。あるどそうきれこいふこひあやまんあど
おぼえて。あまり久しくなりてひねも御あそびずひとや
とゞめんでこゝろのそすくおぼして。へ縁ぬればぞ流
かゝる海楽りぬれど。げまうくりさびしこゝあかく
へまけりも。ちるきこゞろしぬこゝちまされど。う（漂）志
すまの浦副のおりとおぼしいづれば。今ぞとけ
まうれ縁ても。くゝおもうじ世のうちはこゝとまゝま
しうどゝ。ハヾ身までのこゝとはちさきおもうしく
あまうしし有る海ぞうし。てそのまぎれに

われも人もいのちたへず有ぬまじうぞ。うかゝひおもしせうちと覚しあはす。風うち吹たる夜のけはひ冷やゝかにて。ふともねいられ給はぬを。ちかくさふらふ人ゞ。あやしとやきかんと。うちもみじろき給はぬも。猶いとくるしげなり。夜ふかき鳥の声のきこえたるも物哀なり。わざとつらしとにはあらねど。かやうにおもひみだれ給ふけにや。（源）かの御夢に見え（紫う）給ければ。うちおどろき（源ん）給て。いかにと心さはがし給は。鳥のねまち出給へれば。夜ふかきもしらずがほにいそぎ出給ふ。（女三）いといはけなき御ありさまなれば。めのとたちちかくさふらひけり。つまど

としあけて乳母(めのと)をこならをとら、時(ん)ぐれの音に、雪(ゆき)の光(ひかり)

こそておぼつかなし。日ごろ(まごろ)までとまれるけれまほひ。

やこはおやかなしく独(ひとり)ごつ。雪は源(げん)じ消(きえし)ありくらがい

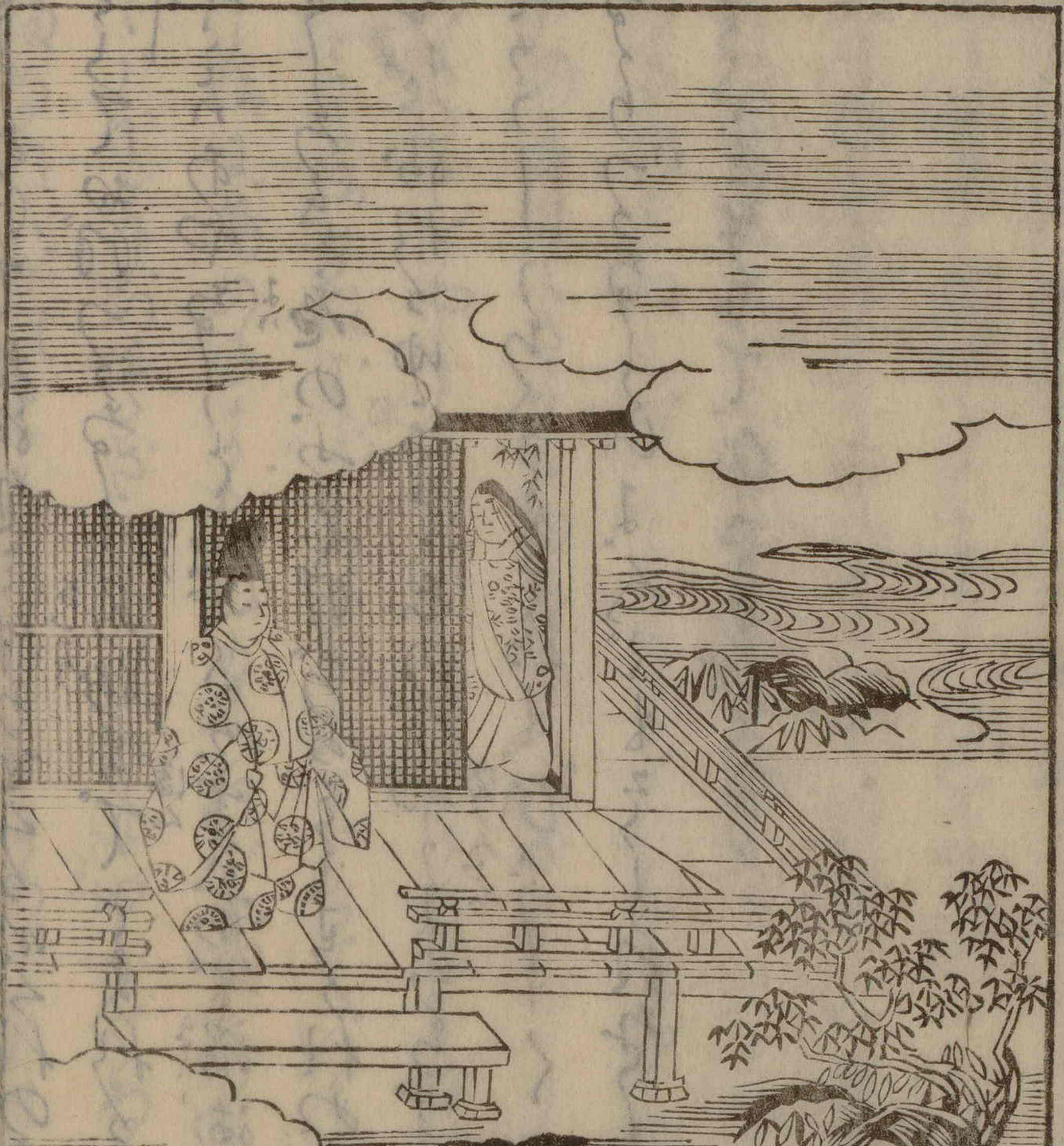
よしろき窓(まど)の、ふとけぢめこしられぬ程なるは。

なるをおれるゆきに志のびやうまうちずさみて、

こうしうちてこ給も、ひさしくうかごと

なりつゝなしひま、人ぐもそこしれをしけ。やく

まゐをなりて、ひさあげゝる



伊行
こよなくひさしうありけるが。男もひえ[illegible]え。
そぢ[illegible]しゆうころのおきろかちしぬまなそあめ
れ。かくはつらきをもしのびやとて。我ぞ（紫ノ）ひ（源ノ）とりやりなか
どしらまつるほどろしぬれる我ひとへの袖を
ひきかくしして。うしもなよなよなけりしきれ
うちうちとけて。まことあらぬ御心よういは。思ふ。うとさづ
うげはおもし。恨（ん）ある人とこそあれど。うらめる
せをとおぼしうらむべくうらゞよろづはまへのことを
おぼし出つゝ。（紫ノ）なげかしきれゑしこそ。恨見えて
その間はうらしめへれば。（源女三へ）えつくり給はで。ほん御
まはれをくらそこそ見給。（文ノ詞）げさのゆききはりおや

まりて。いとなやましく侍れば。心やすきかたに
ためらひ侍るとあり。御めのとさ聞えさせはべりぬと
ばかり。ことばにきこえたり。（源心）ことなる事なの
御返（えう）やとおぼす。院（朱）にきこしめさん事もいと
ほし。このごろばかりつくろはんとおぼせど。えさも
あらぬを。さはおもひしことぞかし。あなくるしと
みづからおもひつゞけ給。女君（紫心）も思ひやりなき御
心かなとくるしがり給。（源）けさは例のやうにおほ
とのごもりおきさせ給て。宮（女三）の（源ノ）御方に御文奉れ
給。ことに（女三ノ）はづかしげもなき御さまなれど。御筆
などひきつくろひて。しろきかみに

（深）中らち紙へぶうり程はなけれども心ことなく

けさのあさ霜。梅はつけなへり。人めして。（詞）まへのをちく

殿ごりましをことの絡。（地）やがてつぶして。むし

ちくおりします。さころされでども。むきなて。花を

まさくりなつ友。まつゆきれはのまかれなうへり。

打ちりそふ花を詠（ながめ）なへり。鶯（うぐひす）のけやかり。ちりくさ

紅梅（こうばい）のすゑまうちあるさころを。袖にそへはへと花を

ひきかくして。こすなしあげてあずめなへ家さ度。

夢はまもりうる人のおやまて。ぞまきくくねとこえ

縁りず。けうあす度めしこされさ度なるま。（女三ノ）ぱくへりそ

こし程あうくちきれば。はりあて。（紫）女ぎえは花なきこを

きり給。（源氏）紫とのつらくこそはいまはしたう給ふ。（女三をさへふかくあり）
御はうゆしていふ文ちりぢりくもころくかなくや（紫を搔きさへて）
二 おしましあるどの給ふれもおもくはうつろそぬほど。
めとまらぬやおほえん。紫の盛（さかり）はあくべてこぞやなど
の給は。（女三ノ）かれうへりあり紙のうすやうえり。おぼやうえり
をつゝまれさうをむすびつけてけるのいとよう（源氏）
み紙。はしこをなしてあしぎや。べうといちけれ
ど。おもくきこやうるんいへのほどくうしけ
あしとおぼすに。ひきうし給ひんもこころをさ
一 。おもひべかれば。そぞしひろげすへるを。（源ノ）きりめにみ
とことんてそひみすめへり

廿五 はかなくてうはのそらにぞ消（きえ）ぬべき風にたゞよふ春のあは雪。御てはげにいとわかくおさなげなり。（紫心）さばかりの程になりぬる人はいとかくはおはせぬものをと目とまれど。見ぬやうにまぎらはしてやみ給ぬ。（源心）こと人のうへならば。さこそあれなどは忍びて聞え給べけれど。いとほしくて。（河）たゞ心やすくをおもひなし給へとのみきこえ給。（源地）けふは（女三）宮の御方にひるわたり給ふ。心ことにうちけさうじ給へる御ありさま。いま見奉る女房などは。まして見るかひありとおもひきこゆらんかし。御めのとなどやうのおいしらへる人々ぞ。（めのとよろどしん）いでや。この御有様（源ノ事）ひとかたこそめでたけれ。

紫上ハ女三のおさへ給はんとし
めざましきことはありなんかしと、うちまじりて
思ふもあり。女宮は、いとらうたげにおさなきさま
にて、御しつらひなどのことことしくよだけく
うるはしきに、みづからは何心もなく、物はかなき
御ほどにて、いと御ぞがちに、みもなくあえかなり。
ことにはぢなどもし給はず、たゞちごのおも
てぎらひせぬ心ちして、心やすくうつくしきさまし
給へり。院のみかどは、をゝしくすくよかなる方の
御ざえなどこそ心もとなくおはしますと世人
思ひためれ、をかしきすぢ、なまめきゆへ〳〵しきかたは
人にまさり給へるを、などてかくおいらかにおほし

源心女三ノ評

朱

女三と

そのひとん、さらハつとれ心とゞめていへる、（女三）ことふくしきとしそうとも、ちいぐちおしかれど、よくりしずミまり給、ゞ（女三ノ詞）男し給まゝま、ろよくとるびきぬひて、此りくへなどをもおぼし給けることゝ。いえけちなくこちのつとまひ然て、えここなるずこし給。（源ノ）昔の心あるしきうしうかりぶうてそ心をとりせまりしを、今え世中をそれさいぐるまやひたずしめて、とおもかをかゝるも、さはたちゝゝことは、うさきされなりぞかしとりぐはこそおぼうハありつれ、（女三ノ事）よそ志おもひハいとおしまほしきほどなりしとおぼえてり。（紫ノ事）さしあへびめかずミまりあへるさしぐるしからも。

紫のうへ（紫）の御ありさまぞ。なしおもかさき。され
なだらかもおもてなしてうちとおぼえ二葉のほど。
あはれまさるしくおぼつかなくいとゞしうされ
こゝろざしのまさりおもおどろくおぼゆんとゆく
しらまでなん。院（朱）のこうど八月（二月ノ事）のうちに。（仁和寺）こちらに
うけろひなめご。この院（源）に参るなり（朱ノ）御せうそこども見え
給ひ。姫宮（女三）の御ことはさしあたり。（朱ノ文句）見づくりくいつくは
ふく面やなど。ぞうりなすちくてどもうくを
すぐれ心よくけてまでちしあるべくぞびく見え
給けり。されど（朱ノ心）参りうちろめくおさなく（女三ノ）おもはする
とかひなくし給へり。紫のうへにも（朱ノ）御もこえてことは

あり。（文句）おさなき人のこゝちなき様にてうつろひもの
すなるを。つみなくおぼしゆるしてうしろみ給へ。
（女三ト紫上トハいとこにて）たづぬべき故（由大）もやあらんとぞ
（朱）そむきにしこの世にのこる心こそいるやま
みちのほだしなりけれ。やみをえはるけできこゆるも。
をこがましくやとあり。（源）おとゞもみ給て。（問）哀なる御
せうそこをかしこまりきこえ給へとて。（朱リ）御つかひ
にも（紫ノ）女房して。かはらけさし出させて。しひおくるを
御（紫ノ）かへりはいかゞなど（ん）きこえにくゝおぼしつれど。
ことゞしく（おもしろ）面白かるべきおりのことならねば。
たゞこゝろをのべて

紫そむくせのうしろめたくハさりがたきほだし
をしゐてかけなはなれそおぼやしまであめりし。
女のさうぞくにほそながそへてかづけ給ふ。紫ノ御手
などのいとめでたきを。朱院御覧じて。なにごとも
はづかしげなめるあたりに。女三ノいはけなくて見え給ら
んこといと心ぐるしう思したり。地今ハとて女御
更衣たちなどおのがじしわかれ給ふも。哀なること
なん多かりける。断内侍のかんの君ハ。西弘故きさいの
宮のおはしましゝ。二条の宮にぞすミ給。女三ひめ宮の
御ことをおきてハ此御ことをなんかへりみがちなり
朱ミかどもおぼしたりける。断ム尼になりなんとおぼし

されどかゝる（朱ノ）きほひにはしたふやうに心あはたゞしといさめ給てやう〳〵仏の御ことなどいそがせ給ふ六条のおとゞ（源）は哀にあかずのみおぼしてやみにし御あたりなれば年ごろも忘れがたくいかならん折に対面あらん今一度あひ見てその世のこともきこえまほしくのみおぼしわたるをかたみに世のきこえもはゞかりぬべき身のほどにいとおしげなりし世のさはぎなどもおぼし出らるればよろづにつゝみしのびけるをかうのどやかに成て世中をおもひしづまり給ふらんころほひの御有様いよ〳〵ゆかしく心許なかりければあるまじき

ことハかばかしう、大方のれよふこひりこと

つけて、哀なる事まつれよ見え給。（脇）こうくしうる

べきされおもひなしれバ、ゐりもおぼえつけて見え

うし給。（脇）昔よりもこよなくうちぐしどこのひえて

まうられけるひとそ（源ノ）給まもおぼん紙まひがゝろて、昔の

（脇ノ中ノてうく）中納言の君の、まもまし心あさこゝろぐまをつるよ

の給。彼人（中納言ノ君）の世とゝもにうづこのこゝろさしを（源ノ）めし

よそへて、ゆかしく、いかへまうへりてこゝろひ給。

（羽）人づてならで、掲げしまゐらしきすべきことゞあん

わざりめべく見しなびりて、うるしくきのびて

宮ん、いまださやうのありさまも所さ方のほどにて。

おぼろけならず志のふかゝらんとあればぞこゝをも又

人にはもし給はじとおもふらんこゝろはうしろ

やすくあらんとの給ふ。かんの君（詞）いでや世中をおもひ

しるにつけても昔より（源ノ）つきされこゝろをぞこゝろさひ

つあつかさしごろのそでは。哀（朱ノ山ニアリ）はうすくしられこゝろを

さしをきていかなる昔がくりをさへそんげは人い

ありさめぬやうなき心のとちんこそいとちがひ

かなべきれどうち歎（なげ）き給ひしおもかげはあはれに

よしとのこゝろも。（源心）いにしへよりあまりし世より

ぐらは心うし給はぬことまでもおしぐりしを。

げに（朱ノ）そむき給ぬるれしあぢきなめるやうには

おれど。おほざりしくはもおはれば。今ともけざ
やうすさまりて。ふちのしげみいまさうしよ。
さりへしのべきさやとおぼしとうして。けし土いの（和泉守とこ）
ざれもうそきのまうべきて。おふで給。（注）ぶ君はい。奈の（源詞）
院にね挑する花（ひくら）煙（まつひく）の君の日ばかりひて。ひさしく
歌はけるを。おとはげしきまぶれありとうちつられば。
いと（おり）おしくてちん。ひうちぶけぶやうはつくらんも
びんちさ我。夜のおはまぬびてともんさひ給ら。へ
まもうくとも色さうしそうじと守九のて。いつといくてこころ
げさうし給をき。例（ぜん）いさうしもこぬおくらせ。おや
しとこめて。とひおとを給ふとも。おれど。娘（女三）文のれ

その頃い、かずもいとすさまあうとのやうには
おはず。さてそへかゞう心をひて、こしめやうまて
おはす。その日（源）いきん（女三）多人も渡（ひさ）り給ひで、わことさ
くるし給ふ。こゝ紙ちがゞまゝ（源ノ）心をへてくるし給ふ。よりひ
さして、むつましき人の限（かぎり）宮又人ばかり。おぼろ（次ノ句ノ車ニ付スベシ）車の
昔おぼしてやつれたるまゝにていでなふ。つゞとのみ
しつれもうそてすみかなふ。（膝ノ々）まくつくりおりしも（まし）し
さるしさしめてすまゆれば。（膝）おざるさあて。（詞）おやさく
いつやうにてかなりさけむけりとまへど。（和泉詞）おらし
やうて人しまんなづとびんちやうゆうんとて、
あれがちなるさひめぐしてつれなう（源詞）は、とかくしひ

かく思ひて、ぐろまとに物ごしにてもなくは
昔のおぼじき心かはらずありけるをと、
わりなく思ひの人ば、（源ノ）いとくあげくねざりむめへ
ま、（源氏）されどもよろづけちりきはとかくおぼさるゝ
さころおぼろけなうめれこしろつきちられば、哀も
すくよかならず、（二条の院ノ東対へ源の御座所へ）ひんがしの対にわたりけるに、この
かのひさしは（源と）すべならで、ござましのそうし
かくめぐれども、（源何）いとわやうなるうちもまさられ。
年月のゆきかはるをも、まさられちかくなりへうつし心
あはれひはらく、おぼめしきいゝうつくしそと恨
思しわぶ、哀りく文行、むまはおもぶれなしの

男しのふ。我のうく文ゟ。むまはあそふかれしの

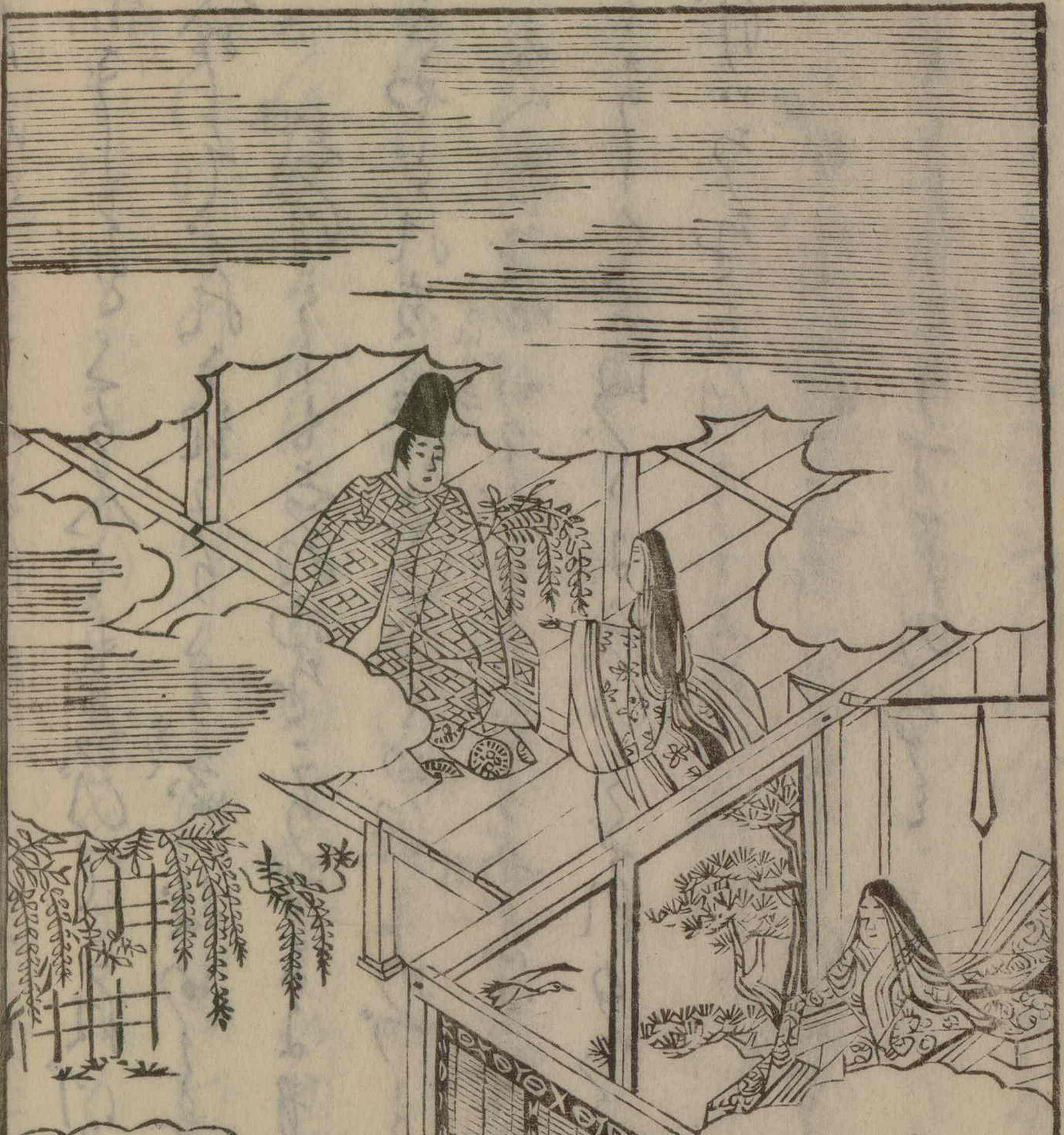
こゝちぐるしげ衣に男して。ためしもなく人せんすくなき
家のうちの有様は。さびしうつりし世それとおぼし
づらるは。庭いぢうがまねしかねど。あかしぢら閑
もあまらん。昔はかうりて。おとろかしくしくへ男し
様もなし。これ（あひのさうじ）をそうてやとひきうどうしのふ
（深）年月を中に隔（へだて）て厚（あつ）後（こう）のさびをさゝぐく
おつるあゝくぐらろ。や
（賤）閨のさびさとめぐくさき志水そりのふ庭い
ちやく絶（ゑ）まさかおどろけちちれ男しあへど。（賤ふ）つゐしへ
をおぼしいづるも。これはうりおぼうりさらいくらじ
さらともおうし世のさみざぞと。さひ出給はげ

今一たびの對面しありもすべかりつるにおぼしまうでこ。ぢ（地）もとよりうらめしやるまじ事はおりをざりし人の。ぜしだいはさめぐは世中をさひまうど。どうしろをくやしく。おぼしやりつるほどのことはなかれつ。殺（ぎず）もなくおぼしあつめて。いとゞいとゞし給はられど。昔おぼしゝかれ對面り。ぶなる世のことも給りしぬ心ちもそへ。え心づくしもあてなし給はず。る給らうしくわうらうしくて。うちなしぬ世のつましさをも。衰ともさひこぼれて。験（あげ）きがらまそ地し給さしこゝど。ど（涼ム）さじめてんよりもゐんつゝしく哀まて。おけゆくもいとにおしくて。む

給りんをまねしおきてけのくゞあめそしまゝまく
ちどりのこゑもいとうらなき。翠もこれらまよ
色そ名かすめる梢（こずゑ）のあさ緑（みどり）なる声（こゑ）。ふぢの宴（えん）
さ給し。げにのことありえんうしと覚し出るまゝ。そし
月の照（て）まさるけり羽もぞの折りのつとくさつげ
あまれにおぼろ。中納言（権ノ仲忠）の君のゝまりをかゝて。
兼雅もしおけるまゝ。言（涼）ひかゝりて。この君（源）（嫐とおもふてかへ）よいかる
漂（そう）けん多まゝ猿えむしぬこゝろそふ心ひまうこそいふ
でゝこのげいさうそあるんべこきしまりおつくぞ
ぞてまゐしやすゝひくり。山（中納言君ノ）（こざ）いよりさし出る
月のをあやかりけ。ぎしあひ。めでたくやくの心ち

すかれさ夜のゞまらくわびしさてあかしかれけるに
あるゞねざめづらしく行くても言すかはましてまれ
つきあらずおぼゆればさらにまてもえずかこ（勝ノ）
まうるし給はざらん。かくやげにする恨（うらみ）みて。
これしこなまちかれ給ふともありしを。おそれやの（恐れ）
よろづる心をつくしおもひ。よしぬ世のさはざる。
うらゞしくされ名さへひいでてやみうらど
さひ出しか。名おぼく語りぬらん此物語のとぢめ
まはげるのかりあしをまほしきげさあかを（傍ノ）
（ほし）許を心まえまうをさせ給まじくぞうこの人（釈白ノ）
うちとものそうしつましきれば。やさしくさし

おがりゆくまでうちあはくしくそで。らうのちはれ
車さしよをさる人ども遊びてはげしうこゝち也。
人めして。これさ紀うりこゝろ花（はなこ）一枝折しをとりまへら
（源）志げうしも忘ぬ物をとうずまゝ扇をちるげに
ぞさやどれ落涙にいとくおぼしつゞひてとう
おぼくるを。心（中納言忘ん）ぐるしうこゝちある。女君（勝ん）も今宵ぞいと
つましく。さ夜ぐまでゐひこぼれのへるなり。花（源氏云之）乃
げいちをあけりしそて
（勝）扇をあげんかちまこしとの御（此）あとでけじ
やさしうしうずものちなき



いとハやかなれかつまひねぞ。うろあそばしとも
ゆかさぬことゞりあそばしあそばし。君ことゞまの
うらうぬさ電まや。いとよくきこひまゐらせ出
給。そのまゝも人よりこよなく心とめて御まへのへ
ましれ心ざしあさゞ。ちけうまでやまゝしれなる
らひまは。いづり衣もすくなん。いづゞく遊び
いりのへるれねくされのゝ段を。給うけて。女ござさ
ぞかりなるんと心えのへれど。おぼめしくまて
なしておいうす。中くうちかすべなどしのへんより
も心ぐるしく。おぼつくきてもこゝなるちのへんと
おぼされば。おりしよりけるかつきちござせのゑ。

あぢきなき世をうけて宮に給。（朧）けんの恵のなごとも。まへ
もしすべきなるれど。いにしへのことまりの（紫）へれば。
（源氏）まかせはおしるゝど。撫でつまもつありける対面
あん。御ありあらちすうぞひとめとゞめおか
まじくもそうくしてゞ。いま一たびもとゝうひ
きこえ給。（紫）うちわらひて今めかしくも成かへり給
ありさまかな。昔を今にあらためくはへ給ほど。中ぞら
なる身のくるしくとて。さすがに泪ぐミ給へる。
まミのいとらうたげなることある。（源氏）心やすからぬ
御けしきこそうけれ。らでおのしらるひさつゝ
ねびしれたましへまへん。（つぼ）藤あるべくもおもはり

こゝろぬさぞもずまにてありにけれころあはれとてよろづにつけてろとり給ふにおはすることもえのうし渡りずぬめり。宮（女三）の御方にも。（源ノ）ところえわたり給はず。（法を）ぞうしらへきこえつおりしますす。姫宮（女三）はあるまともおぼしいぬれば。うしろそどもぞ。やすからずこゝこてけう。げ（女三ノ）りしらんあはゞこそ渡りしらるゝば。（女三との逢語を云之）そあるらもよしして心ぐるしうなべき御。おぼひらるゝうけしこさせておそびくるもひこえてなへり。きりつぼの御方（明石姫）はうちはへえまかで給はず。御いとまれ有がたれば。心やすくならひ給へる（明石姫ム）わかき御こゝろに。いとくるしくのみおぼしたり。夏ごろなや

ましう給を・とみにも（春宮ノ）ゆるしきこえ給はねば・（明石姫ニ）いと
わりなしとおぼす・（地）めづらしきさまの（懐妊之）御こゝち
にぞありける・又いとあえかなる御ほどに・いとゆゝし
くぞたれも〳〵おぼすらん・からうじてまかで
給へり・姫宮（女三）のおはします御でんのひんがしおもて
に・（明石姫ノ）御方はしつらひたり・あかしの御方今は御身に
そひて出入給も・あらまほしき御すくせなりかし・
たいのうへ（紫）こなたにわたりて・対面し給ついでに・
（詞）ひめ宮（女三）にも中の戸あけてきこえん・かねてより
もさやうにおもひしかど・ついでなきにはつゝましきを・
かゝるおりに申しなれば・心やすくなんあるべき

（衛門）おとゞは男しめんじやうちかうそて。（衛門）ゆかやうなるあはれ
さる人ひまこそいはあれ。けとはかなげに御しつ給
めかしきうちやすくとくへあしらへうとゆかし
さうて給。（女三）（紫に）宮よりも。むかしの君のちかづけゐてまで
ちりんとかうばしげ。ぐしすましのさいくろひて
おもすゞかをひあつしとこしらへうるゝ。（衛門）あとゞも
（女三）宮のはらからにけくりあて。（衛門）みゆる其了待り
（紫上）人の。淑景舎（しげいさ）（桐つぼの方 昭陽舎と）に對面せんとていでこなたいでては。
ちかづき男しさをまねしげるまれすめるをゆか
してうらしひめへ心あどいとらうさんあり。ゆゝ
ワくきつてはあそびかさまもにさねつしず

なんなど男の給。女三宮もつしうこそいおしめ。給ずとう
こさえんと。おひしるまのみふ。源氏人ののしへにことゝろ
ちるぐひてこそい思し出め。べぞそさてなかて
なしのひそと。こまるるなしへ男の給。れん中うつし
うそ思しなへとおぼせおまりる。給心なされ女三ノ有様也。
紫ノこあしいされんもむづしくあぢきなけれど。紫ノさ
の給ひんを。心へぶそんもおいなしと覚ぼなりけり。
紫甚まはうくいぞさちなどしふまれくし。んられ
よりこの人やいおるべき。身の程のまれちるなき
こ海ぞ。そさなりころぞろこそおしめ常ど。ぞひ
づけしれてうちなずめ給。紫まなしいなどすうなも。

とのゞかゝとも。御おもちしさすぢのえうく
ふかを。さゝがけのはなれおもゝとおほえもと。
こゝろぞおぼしもうへ。院（源ゟ紫）のりたまて家（女三）（明石姫）女流乃
まめだちのれなりさ御どもなど。（源ゟ）うけとしうもおりすゝ
かれど。さ御ぐこゝろかりまへるれ愛うけしうも。
年ごろめなれたまへる人のおもかげがいとゞ
うくおどろかるべきさまもおもひぬを。（紫と）おもほしくひさく
こそたとこゝおふ。（池）おりがらことわりし（源ゟ紫ノ方ヘ）おぼゆべき恨
けなうもぞ。げなどのひろまそひて。（たゞか）
やうきいまめかしく。御ひめさくら。さ御ぐの
かゝりもとりあつめ。めでたきまこそ給。しぞ

よりこしハあまり。此日よりハふみも通ハしく。
つれなめるれぬさ夜のまくらまへるを。いづくしく
しもありなんとおぼえ。紫ノうちとけうつれ手習（てならひ）を。
硯（すゞり）のまくらまさしいれぬれど。源こうけので。ひさ人
しこめふ。あなどれいとけざとむとみて。
らうくしくうけくしげなうさかへり
紫　男ならく杉やこゝめんこゝまて萩紫（おとゞ）の
山もうけるひなさり。とあら雨な。源ノ地んとゞめなて
源　水鳥の萩紫ハ冬もうちしめど萩（とざ）のまくらこそ
氣色ことなれ。あなじうきそへつすさひ給。紫ノふとう
あれそ心ぐるしきされ氣色のまくらまけ。此のづ

ありつゝゆるさずとおすくけり給へるも。有がたく
哀に（源ノ）おぼさる。（地）今夜は（女三と紫といづくへ之）いづくにまれいとまありぬ
べければ。（源）彼（朧月へ之）忍び所へ。いと見まほしくて出給ひぬ。
（源ハ）いとあるまじきことゝ。いみじくおぼしかへすにも。
かなはざりけり。春宮の御方（明石姫ハ）は。ぢちの（明石）母君よりも。
（紫）此御方をばむつましう頼みきこえ給へり。
いとうつくしげにおとなびまさり給へるを。心（紫ハ）隔（へだて）ず
かなしと見たてまつり給ふ。御物語なども。いとなつかしく
聞えかはして。中の戸あけて。宮（女三）にも対面し
給へり。いとおさなげにのみみえ給へば。心やすくて。
おとなしくおやめきたるさまに。（女三ノ御母ハ紫ノをば之）昔の御ちすぢ

さも或（それ）男ゟ給。中納言（女三ノめのとの子）のめのとこいふ百（め）坐て。（濃羽）おな
じくぶしを或○男ゆれば、かうぶけあけれど。もろぬ（女三を供人）
さ毎（とへ打もかぬとく）まゐこてさすれど。けいそなくて待りつゝを。今
よりいうとうくず。おなくしあなどまも抱しなそなこ（紫ノ方ヲ云）
うしんことをば。おどろうしあなども抱しこ海りん
あん。うれしかうべきあなどの絵へだ。こみもしこされ（めのと詞）
げどもま。さ海ぐよをられ男なて。心ばそげま
おりしまなめうを。こうれゆうし待うめれだ。ます
こゝあくあんさふなへとれけり。そむきなひあし
うへのゆころむけもこぶうくあんれ心へぶて男（身）
侍従おぶうもけあなされ首傳をも。むぐてことめし絵

めぐるぞ侍りし。うらくまでさちんこれミ男ハ、を
猶しあはれこそも。いとゞくやしけなりし（朱ノ）れなう
そこの内にハいづくとのうへと思ひ侍れど。かなはずまつけ
ても。かなはぬ身なれば　うちしほりしほりと。やさし
らるる。さとゝなびくけひまそて。（女三）ゆゑハも我心ハつき
めべく。思ふなれどのこと。ひたおかのすてたまゝに海辺の
やるかたなくして身へだてハ。（女二ふ）いとゞく心ばかりのあなん
くれし。おもひあきられこなたのはからうちにけふの人り。（地）さて
のちハつれなき人をうらみて。うきしほ
あそびのなきをまつけても。うとくぞ思ひしけり
猶ゝ世中の人も。おのおのかくひとりハ我めをあはれの

ことハりひあらふまれあれバ、らじ鳥川らいた墓
のう（笑、）へいりくまおぼすん、れおぼしつとこめらし
池のやうまハおそくをじ、すうしハをどりあんあぢく
つひけるを、今すうしつとされ（涙ノ）心ざうしづくてしも
まかるり佐俺あるるを、ありれまつけてもあるやまりうず
つふんぐあろま、うく（笑ノ）るくげあくさんこうふしうるて
のんべごとあるとりてめやすくあんあくけり、神無月ニ
墓のうへ（笑）、院（涙）の仏像ニ、さが[illegible]く仏堂（どう）入りて、薬師（やくし）
佛供養（ぶつくやう）じなり給ふ、いうあるさとハ（涙ノ）、をとらニいそあ
よしあんバ、墓のびやうよとおぼし召てしり、仏（ほとけ）経（きやう）
ぢらし、ぢせのごとくのへ、おもとの極楽（ごくらく）ぞやひやうの最勝（さいそう）

王經（わうきやう）・金剛般若（こんがうはんにや）・菩薩（ぼさつ）會經（ゑきやう）あまどいつとゆるされ衫（み）も也・壬六十
上達部いとおほく集りあへり・ざうしの庭雪白く
いもんりうちく・紺紫のつげ・きけりものべの様よなま
ちゞめて・こゝもれあるまうらへいさをひおりなま
のふあるべし・霜がれはらはの壁ぢうしのまくよ・馬
車のりちがふをとこちげくのびあふり・ざずきやう
我もくと・れうぐく（花ちる明石なども）いめしくもさうせぬふ廿二日
かせれ（源ノ）年尺の日よて・この院（六条院ノ多）ハうくすさ庭あく
つゞ（女中元）ひらまへうちるゝ・我れ（紫ノ）はらしの暇とあかぼして・
二条院まてそのれまうけいきさせ給・流さうぞくを
ちゞめ・まうるしのこともし・これ（紫）こあすらそりのこ

志ぬふたを。此方ぐもなうべきことゞも見えけて。のぞみ
つかうまつり給。毎いどゝもは人の為にはしくらうをも
らひて。菩ぜん誌大夫院目しつもへまでのまうけ。
いうめしくをさきせのかへり。もん菩のもちもちいでたを。
倒のしついひてらそんの倚子をてらり。おとくの
而のまゐるれぞのつく急十二をて。夜冬のれよりそひ。
れめす夜あまど倒のごとく。甚のおやのおはひども。
うつりくさしけろて。うちの心いおもしもず。
おまへまを抱のつく急かろうらのらもきすそ
ごのおぼひしこうりうぎうしの甚もがんのけそく。
いぐ田の多浪の彼はねわる心ぜんへねがい。跡景合乃

れあづりまでおりしの此方のきさせしまへる。ゆん

わく心ことわり。うきころのれ屏風四枯（よづう）も。武（紫ノ文）家

あるんをさせ浴けり。うらじく訓くして。俯の四季（しき）の絵（ゑ）

おみれじしめづらしきんすい。遊（えい）あどめあれぞ面白

しかのべつそへて。ぞうこさ粕のくづしわさよろひ

ふそくれでうどくもれいのことあり。さちうさの白さ

しよ。どぜつ。左右の大臣（ひだりおとど）。武（紫ノ文）家をりじめありて。

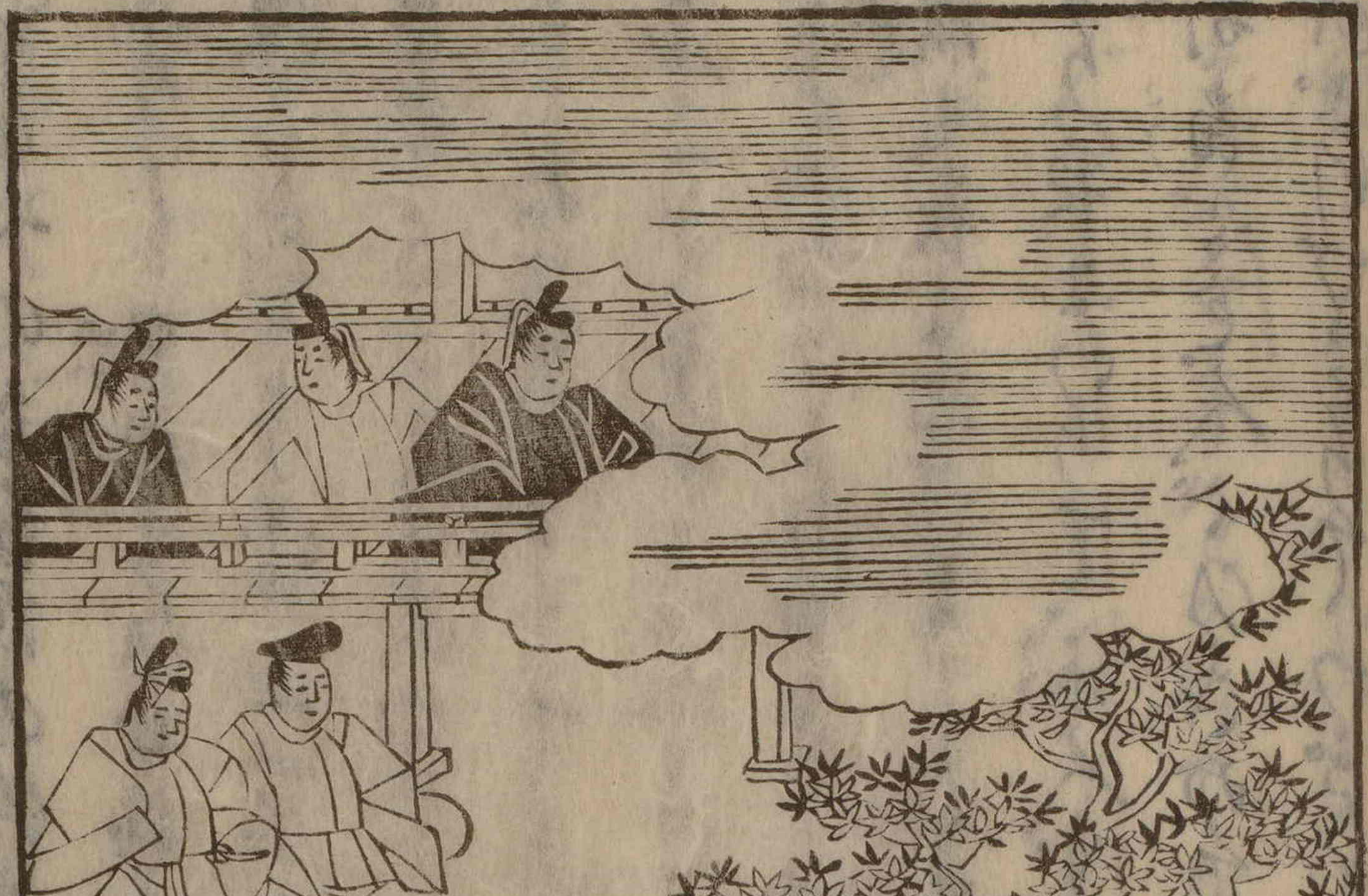
つぎいくいましてま絵（まいり）をぬひとあし。舞（ぶ）其（さ）ら盛ん

きうま。ぶ人（ぐえ）のひくきりうちて。おしひんぎしまらん

ぢさ八すぐ。かくのくひら四十づゝそてうら。

ひけじの時ぞりま。ぶ人（ぐ）まいるまんざいらく

けうぞやうやゞ舞（まひ）て。日暮るゝ程に。こ度のらん
しやうしてらくそんのまひ出るほど。打れつるの
めあわれぬまひのこ度あわれば。まひもつるほどよ。（撥タ）
中納言濤（柏）の琴ありてびわやをほのまゐて。
紅葉のかげに入ぬる名残。あかずけうありと人ゞ
おぼしうつる



じやうへの菩薩院のかざり（紅葉の賀くわす）。青海波（せいがいは）のいくらど
かりし夕部（ゆふべ）とひ出給へども。将（タ）中納言。清（柏）つ経
の。まさをとらしず立つゞさ給ひけり。せゝのおぼし
召給ひくちらういあどくも。おさくをとらしずけり（りさ）
らしねいやすくえてさへしそあだこよひの翁とも
ぐぞへて。あをさるべこきまて。昔らうくちうづさ
さられあらしひあちりそとめでてらくもふ。あるじの
院（源ん）も。哀よ潤らましく。覚し出しことだ物任（まへどころ）
かり。殺まいりて。承（く）人どもまかりいづ。小の政所乃
別（べ）当（かう）ども。人ぐひさみて。あくのかひつよりて。
ひどりでとりてつざくしまふ。ぢろきさ袖ども紙

されぐみづきて山ざはより池のつゞきたる樋の
よそめには絓箏をかきてあそぶ鶴（つる）の毛衣（けごろも）まがめひ
ゆふぐるゝはあそびもじまりて又いとおもしろ
じはこゝろども芸家よりぞそのへさを給けり。
華蔵院よりわつまいれがびとゝきん（琴）。以（冷）より給り
かへるさりのはしとあど。これ昔おぼしころものくれ
ども。まそめづらしくうきあそびをかへすり。絃（げん）の
おりまもるましすのれおりさ俺。うちわたりあど
おぼしいでゝ。扇の右の文（むねつが）おりをましけば。うる
此笑あど。観をてすゝつかまつりしが。まず
まつけてくはゞこゝろざしをもえありけんと。おもはず

くちをしくのこさひ出給ふ。（源ん）けんしにも平家の
おりしまさめことを。あすまでとまもらへあくさう
ざうさくゆばさうくに。け（源）院のゆくとせざるに。御の（あ）袮
きさ后のうしこまりをつくしても。えこそ出しぬを。
よろしきにあらぬうちし給も。こそしいこそはれ
聖ばこそつけて。こ母さるどもあるべくゆばし
ときこそあれど。世中の見づしひあんこそ。さしくに
きこせ給まじくあんと。（源ノ）いちびやし給こそ。こびくに
咲ぬれば。口をしくゆばしとまりぬ。きさきの女国
あまりの程に。中宮（秋好）までぞさせのて。（源ノ）こしの御りの
これいのりなる。その家の七だちかに。偏経（きざう）めの代四千

ぶんぶちうき経（きやう）の四十帖よ。ふめ四百巻（ひき）をけうちて

（紺紙ノ）きらせ絵。みをぐろきれえぐくしを覚しきらあずら。の

ぶすまつけてうハ。かゝされ心ざしをもおもうし給

らんぜさせ給ちんとそら。（先坊）家もくれ息（二まどころ）家のおもを

ましれ。あれ心ざしをもこりそへお伴すまゝく

おうずちま。お伴やけゝもみそくりへさせくあへぞ。（源）

るうだお伴くとゞめさせあひつ。（源河）四十の葉といふ

ことハ。さゝさぐどきて綺りまも。綺りのよまひ久し

まくあしあんすくあうりけつせ。山寺ハあをとよみひぐ

きとゞめさせあそ。まゝしまのちまくそんつくそ紙（紙屋院）

ぐんへきせくれまへとありくれど。（料紙ノ）お伴やけざ海まて

御代いといみじくなんありける。宮（秋好也）のおはしますまちのえん饗にはきようひなどして。さ紀くよことまかりすぐ遊びの禄（ろく）など。大きやうならずらべて。うちうちはしく女のさうぞく。非参議（ひさんぎ）の四位。まうちきんだちなど。その殿上人には。よろこばしほそなが一かさね。こしざしまで。次々（つぎつぎ）にしたがひてさうぞく。限（かぎり）なくきよらをつくして。えさせあそびれもとありし故前坊（こせんばう）の御方ざまにて。つかうまつりふるき。まうる家はなん。ふるき世の一つの物となれる限りこそあれ。（源へ）けれどひまいつは楽りなんあやしく物ぬまゝ色。[illegible]

つげさめれど。いとうつゝさくて。こゝちそゝれあまりける
ひのこゝちせば。えぞうぞへあへ給はめや。（冷ム）うちらまい
おぼしそめてしことども。しげなやいとて。（夕）中納言
まぞつけさせたまひてげり。それの（柏木事）右大将やまひこそ。
おづく給けりなど。この（夕）中納言は。（源ノ）院御前の程よろこびくる
へんやさうしめして。儀（まくわの）は（夕ノ右大将に叙給之）あるじをあり。院（源ム）もよろこび
興させ給御うるとく儀（よはひ）あり。あまりある院（まつび）熱なん。
いちざやさき心ちし給ひとひがしの院。（花ちる里の方之地）らしさらの
まちまに。（夕ノ）あらしへひまうけめて。ざうしへうつやうに
あるじのくれど。たふいあねとくまぞしる
まゐりて。京の饗（きやう）なども。蔵（くら）づかさ穀倉院（こくさうゐん）より。

つかうまつるをはへり。さんざうちど。おほやけざま

まで。頭（源少将）中将。宣旨有りて（せんじうけ給ハ）、こゝろちよ人右大のおほく

大納言ふたり。中納言三人。宰相おめ人。あさぶ人。な。御の

（冷）内。春宮。院（集）のこりすくあし。おほしれでこそほどは。

御前き（以）御ぐ。くはしく（うけ給）有りて。つかうまつるをはへる。

（冷ノ）くぶハ御ぐすありて。げ（以ノ）くりまいりはへり。院（源）もいと

りしらくおぼろきりめて。これ（源）ざまつきのめ。まや乃

おほかたむかへて。おとゞ（以）の御産あり。いとよろしき

まれくちくふかりて。これおぼ（つ以）ゆぞ。今さりの

きうさくとはえしのへる。おしの院（源）は秋いと

けふさ源氏の御さしへ給。屏風（よ）宮（づ）枯り（冷）ちの

れなうをのへつゞしのおやのみすゞんけり。あくさ

ゑのさ度などは。ところくならんや。いがおもしろき春秋の

いろゑなどゝうもこの御屏風のすゞつきれうや

くさまは。めもとよぎず。ちひなしさへめでたく

あんありけるが。金艶のちぎりしのさもに小宰相などゝ。

蔵人頭より語りのべり。ゆちねのはゝさびもいとし

いつしく姫語はこれば。うちそへて。かうぶ作法(さほう)

いとこあり。は馬守十疋(ひき)だたのつゞき。六衛府(ゑふ)の

遠近(ゑんきん)へか。よりつどくはひきとのあつ猶。向られ

まそめれいの万歳楽(まんざいらく)賀皇恩(かわうおん)などは舞(まひ)。喜春楽(きしゆんらく)

まひて。おとゞのわらりのあへつまゝ。めづらしくもて

ちやしのへられあそびぬ。これ人心をいれのへる
びきく。例の無人（蛍）な家。何くずりも世にうとき物乃
よゐ（ぞ）はおかりて。つとにおもし。（源）おまへにこそんのれこと。
（比ノ）おとゞ和琴（わごん）ひき給。（源ノ）とうのうこんのひまけつれ
こゝのこゝろしまや。いとゆかる哀におぼさる
れば。こんもれなおきゝし給はず。いとゞえ
れどもいづ。昔の此物語どもなど。いでまて。いまそゝる
うられおもしひは。いづくそりつけても。こそく
こよひのべきはむつびなど。心うく見なて。はこさき
あまたゝびありて。物の面白さもぞこゝりなくは
思ひあまれどもえとゞめ給はず。（比へノ）れをくりありし。

まじられける秘琴（ひきん）一このみ給ふ夜笛そへて、しらん
のこにひとよろひまかうの御だうのさう乃ちゐ（まさ之）
おぼいれて御車にをひてなれかよ、御心まどひも
むかへうけて、右のつかさども、こ夜のかゞしての
しろ、六条ゐの官人（くわんにん）のかくだ、大将（夕）かふ、御心（源ノ）とそぞ
かていつめしこゝらじめば、しばらびどくじめかへれど、
内（冷）、春宮一院（朱）、后宮（秋好）御つぎ〳〵のれゆりつくしき
猶、いひちらずすこし、わらゝとあれば、花ら家おり
まはめでゞくあんおぼしけり、大将（夕）のうぢ（源ノ御子夕ナドヲイフ）一ところ
おまするど、さうぐしくさへあさき心ちをしくど、
おまさの人はすぐれ、覚しこゝは、人がへもうゝえゝ

かゝるやうに物し給はも・かれもて北（葵）方の・御勢の
家さて所ゝの・饗（うゝゝ）なくいどこうりし給はん禄乃御
まゝせどものめも思ほしうあん・さ度くあり
けり・その日の御さうぞくどもなど・ひがしの（花ちる）うへ
あんしめいけり・禄（ろ）どもも大かたのことをぞ・三条の
北（雲居）方もいそぎ給めりし・折ふしにつけたる御
いとなみ・うちうちの私のさうしども・この（花ちる）御方には
よそのことにのみきゝわたり給を・何ごとに
つけてかは・かゝるものものしきかずにもまじらひ
給はましと見えたるを・大（夕）将の君の御ゆかりに・
いとよくかずまへられ（源罕一戈之）たまへり・ぬ・さうし

つぼのかた（明石姫の産ノ事）ちかづき給ぬるにより。正月朔日より
みずほうふだんにせさせ給ふ。寺ゝ（てら〳〵やしろ〳〵）社ゝの御いのり
はた数（かず）もしらず。おとゞ（源氏）の君（葵ノ上のことも）ゆゝしきことを見給へ
てしかば。かゝるほどのことも。いとおそろしき物に
おぼしゝみたるを。たいのうへ（紫）などのさることもおはし
まさぬは。くちおしくさう〴〵しき物からうれしく
おぼさるゝに。また（明石姫）いとあえかなる御ほどに。いかゞ
おはせんと。かねておぼしさはぐに。二月ばかり
より。あやしく御氣色（明石姫ノ）かはりてなやみ給へば。こゝろ
どもさわぐべし。陰陽師（おんやうじ）ども。所をかへてつゝ
しみぬべく申ければ。外（ほか）のさしはなれたらんも。

おぼつかなしとて。みわしのれいまちの。中将
墓にうつしまいり給。こなたはおぼきなるこい
あさけらうじらうじもちゝんめぐりてありけるに。此修法の
ぶんひまなくめぐりて。いうじきさんざんぜけどのて
のこゑらぶく君（姫君）この時よりワすくきもこゝもへき
りざちあれば。いうじき心をつゝし給。彼御はゝ君（姫君ノ）も。
今はこよなうさかげんへよそぞありけるし。此（姫君婿ノ）れる
さ度なとこゝ（姫君ノ）さかれ夢の心ちして。つうしうとなり
ちゝづきあれなるとしごろ。ちゝ君（姫君）いかりそひさふ
らひあへい。昔のこしちゞまはしもこゝてきくを
ねはざりけるを。此おま（姫君ノ）ご君よろこびはえへぢ。なり

ていと絹がちにかつめしこゝしくどもあき。さすゝき
出つかうまつりしも。御（明石姫へ）つかへてもおやしくむかし
きへれど。うちまもり給ふしかど。うく家（尼君へ）へありと
ぢらは母のきくをきゝみへれば。あつしくまでおぼ
かへり。む（明石姫ノ尼君）まれのひしほどのこと。おとゞ（源）の君のみ
浦（ゝ）におりしましゝりしありさま。今はとて京へ
のぼり給しなぐれもく心をまどはして今は限。
かぎりの様りにこそはありけれと歎（なげ）かしこさせ。つか（明石姫）
君のくひきこえすけのへうれすく。さ（ち）れいとゞしく
かましここしくはらくことおけば。（明石姫へ）げに哀ありける
昔のことゞもを。うくこえうをざしましければ。おぼつかく

てもいめべりたりとゝ覚して、我なき給心のうち
まはゝげぐこはげなうけだらうて、いうじうべきくも
まはおしざりけるを、芸（業）の人への流もてなしまゝ
がくれて、人のさへうさ庵なれども、ようかなはあらぬ
ありがり君をば又なき給まやひてこそ、家げう人の
ほどこの色、くゝ人のへくゞをばちひけちゞこゝよなさころ
どうりをばまつれ、世人はまくさよつひ出るやうなも
きうんりしあれど、見しえ（ちり）そぬ、だく怨をばめとも
ようくすくし見しくろうすぢゝとちりあずかる。
むまれ給ひん難あれどもをば、さり世をきあれたろさくひ
をてあどしもちり給はざりたり、（地）いとあまり（お）ほどこさ

おへりけるこそは。あやしくおぼくしかりけれと

ありや。彼入道（宮ノ）の（明石姫君）今は仙人（実父）の世にもすまぬやうにて

ゐたなるあまきみ給も心ぐるしく。かたがたには

さひこぶれ給ひぬべし。物哀にあつめておりすてられ

（明石）くゝ（姫君）家のうちて。日中のれうちはまとにまうでくるより

（まり）家つどひ。物さはがしくのらうよ。おほまへ（姫君ノ）にこそ人も

さふらはず。尼君なえそいとちかくさふらひ給。おまへ（宮君）

ぐるしや。こうどかされ事のきこえてさふ

らひ給ゝめ。風おぼしさはがしくて。されげうしほと

ろびのひまもあらんに。くすしおぼしやうのさ夜もして。

いとさうずぎのへらやちおぼ。おほ夜うらもいふて

せうひのへり。（尼ぜん）ようしめさぞ（渡之）して。かつまふとはおぼゆ
めれども。（老もうく）まうくなこゝもおぼくしりかれだ。
あくとうかざゝそねくり。（地）さるはいとさつむらり
ままあくずかし。（尼ぜん）六十ぬ六のほどより。おまふすぐ
いとうかうるは。おそあかさ候して。めりやくうる
あまさまれゝうし。これ。おやまちて昔せひ出うさ候
あれば。（納ん）むひうちつゞれそ。（討）ございのひがこくまや
わつん。ようくこのみれはめやすあすう。ひが切ほし
どもなとうりまぎゞて。あやしき音のくどもずそ
まうでさつんまや。孝の心ちゝそ志得れとうち
ほうゑそこなりめへば。（娘の）いとあ候めし。こなこうの

まそれいかりもいくちづまり。地おぼしかうさ海
はこ給。（宮ん）御子どもおぼし給へずなりにけるまゝ。
いとおしかなしくぞ思しめして。おぼしかづふく
まや。今はかぎりとれ（姫宮殿も如紙てとく）位をさらせの給ちん世る。
かくしもさへきんとこそおの人。口おしくおぼし
すべかりほどある○どいとくおしくかなしくさとり
し給らんとおぼし召れかぎりもてまいまでめうまれ（宮）
かぶ地あまだちくまうあひちなし。（詞）されどかりそめさく
いと心ぐるしげるさひて（姫宮へ）かうてぬる。あまり思ひていと
めでたうかりつくしくまつまうも。涙はえとゞ
めず。うかれは思ひて。なおうちきこえかはどはざりしくる

ざりけれど・まへのわたりうちしぐれてひそみゐね
けり・（明石詞）あなかたはらいたとめぐはすれど・（尼君ノ）耳もきかず
（明石尼）老の浪かひある浦に立出てしほたるゝあまを
（尼）誰かとがめん・（詞）昔の世にもかやうなるふる人はつみ
ゆるされてなん侍けるときこゆれ・すゞりなるかみに
（明石姫君）しほたるゝあまをなみぢのしるべにてたづねも
みばや浜の苫（とま）やを・（明石）御方もえ忍び給はで・打泣（なき）給ぬ
（明石上）世を捨（すて）てあかしの浦にすむ人も心のやみは
はるけしもせじ・（比）などもてまぎらはし給・（明石心）別けん
暁（あかつき）のことも・夢のうちにおぼし出られぬをくち
をしくもありけるかなとおぼす・（比）やよひの十余日の

あしくもありけりあさあげず。やよひの十余日のほどに。たいらかにむまれ給ひぬ。かねてはおどろ〳〵しくおぼしさはぎしかど。いたくなやみ給ふこともなくて。おとこみこ（ワカ君）にさへおはすれば。限なくおぼすさまにて。おとゞ（源）も御心おちゐぬめり。さるはかくれの方まで。さゞけぢかき猶あるまじくされうぶやしなひなどのうちえらり。ひゞきよそほしき有様。げなうひあつかひしこと。尼君のいめまはこゝしくれど。ぐしこちのさやうあれば。わかり（紫の上へ）給ひなんとて。東のうへ（紫）も（明石姫へ）わかりのへり。ちかうされまゝぐしあなて。人の親（おや）のさきて。わか宮をつゝいだきて（紫ハ明石をとつて抱きあぐる）ゐ給へるさま。いとをかし。ゝづくしうくもちう給はず。人のうへを

てまゐらひ給ふるゝびら・とめづらしくはえけれらしく
とひ見えのへりむ・（ワ文ノ）つしげはおうすう禄を・さえず
（告ノ）いづくさらめへが・まゝしのせざゞ（暗く名）しえ・ふゞもあを
ならて・これゆゞれくあうひるゞをせ・けうまつり
給・善宰の宣旨（見じ）ある内侍のすけぞ（湯ノ多ノ）けうまつれ
むくゆなおり（昭教）さちめへるも・（内侍ノ）いと哀な・（昭君ハまろの親とも）さちくの
ことほのさらな・ずうしくあすしぞいと
おもしきをおぼえまほしくけるかげよろ
笑へるなれし給けひとりまいしまし也・（記）その
ほどのぶしうちあどもまゐび（法の君）さんいりとさし
ありや・六日といつはれいのおとゞなりけりかめの

七日の夜．うち（冷）よりもれうぶやしなひのことあり．
朱雀院のかく世をすてゝおはしませばかはり
にや．蔵人所より．頭弁．宣（せん）旨（じ）承（うけ給）りて．めづらかなるさま
につうまつれり．禄（ろく）のきぬなど．又中宮（秋好）の御方よりも．
おほやけごとにはたちまさり．いかめしくせさせ給．
つぎつぎのみこたち．大臣の家々．そのころのいとなみ
にて．我も〳〵と思ひつくしてつかうまつり給．
（源）おとゞの君もこの程のことゞもは．例のやうにも
ことそぎ給はで．世になくひゞきこちたき程に．
内〻の御心めしくゞ心うるうゝやびきまうび
つゝみべきことして．えめでしともつゝまずふまへるも．（源）おとゞの

是も。ワつ象を雅なくいぢらしきなりおて、だ大ぬ（深泥）のおもへる
まうけるなりと。今までえをめ（ぐ）らしぬしきまゝうく
らうえき人ぶまえ人なりゝろしいづけらしえゝえく
のみいぶ（比）しいりなりや。思ぐるまみなをひきのぶか
やうる。（ワつ象ノ）おまぶすけらまのふ。れめみとおぼ心もしぬも
きうるめきで。さやうまゆ中なる是れ心もぐれらなか
ぶかりさえりてうつまつきをみふ。れ（器）うきの心
せきそのらうく是くげりく。おほとあるもの。
さるべきよしはひぜそえりらしうまもうけ
ぢしぬむぢとをほめめとなし。えいのうへ（悲）ハまほ
なしゐどき（器）しうしあて。さいりゆきしなくえし

ちりしうぶ。今ハ（ワつ象）象のれとくまうくむつまし

くりしかど。今は家のれとくは。いとむつましく
やんごとなくおぼしめしよくりち。ごうかくし
おふれ心よそて。おまがりちご。れもずしかりそく
かりおさずろも。いとワくし。時善ばれりしづ
まうそてすぐし。後か。れこざいのおまぢは。よろ家な
えろろのどりまこさもしめおん。おんず覚しけり。中く
こなりそめて無こくもりなぞ。命もえこさまじり
めりば。あ（入道）しまもうしかれくといへさうて。
さろひごまし心ぢらまもいとされしく覚し。されば。いま
あんばせの思ひをこうつやすくゆきちあるべきと。
め（でー）り子どゝめまいひて。は家をべちまあしておくりの

田むらどやうの御か、それそのちものことはじめてこの
国のたくの郡（こほり）は今もりようひがくかうや山あるを
もしごろは志めをきちがうしうしこめりあん
のち、まうひとはしたるべきにもあらずと
ちひて、ごぶするし御ばつあるきこと御りなれば、いま
まであずしくかるを、今はさりたと弘法をくみ之
よてあんうハるひけかこのちうきさしごろとあり
て、宗はことあることて、ひともなようなし
ざりつ、それよりくだし諸人ざうりはけてあん。
一ちぞりまでもおまえはさかべきわかしのことを
きよひけ、ぶもあるう世のとぢめはつかうえて、ぞれ

くるまなれのすへり。このうし（入ぬる文句）だいはおもうしゞせけん
うちなめぐしひゆつれどおすはかはくおとしがを
えんろやうなせのへなしけり。きせつことなるさ
眼は。かすみてうけし夜りしず。かれ文ゞのすへるえめれ
いとまいりて。念仏（ねんぶつ）もけだいするやうな。やくおそうて
あはれもろそこもなさしめを。つてまうけ給はれば。
若者は悪業を案（あん）じて。おとこ女生（むま）れの人よりを
あん。かく悦（よろこび）し得。まゆへはことづしうくつらきを
山がしの身ま。今更にこれよのさえをしらずとも
仰しずさをてしずの年代。心ざくあく六時の行とめ
まも。くずれしとをこころまかけて。蓮（はちす）の上のつゆ乃

ねがひをばさし置てあんねんとぞはべりし。我おもひとむまれ給ひしとぞ。そのさしの二月の衣裳の後なることやう。こづゑしすみ（須弥）の山をあふぎのぞみけり。山のたかさより。月日の光（ひかり）さやかにさし出て。世界てらす。こづゑは山のをものかげにかくれて。その光をかくさず。山をばひろき海にうかべて。ちいさき島のなかにて。雨の音をきゝて。こゝろもとなんと侍し。菱見て給よりかずあらぬ身は。たのむ家にいづこあはずして。何ごとにつけてかはかりあし。さこれをば侍いでんと。心のうちにおもひ侍しとぞ。その比よりうしまれ給ひしころぞくの方代わをぞ侍し

まなびまいる。内教の心をば我の中にも。後を信ぜしく

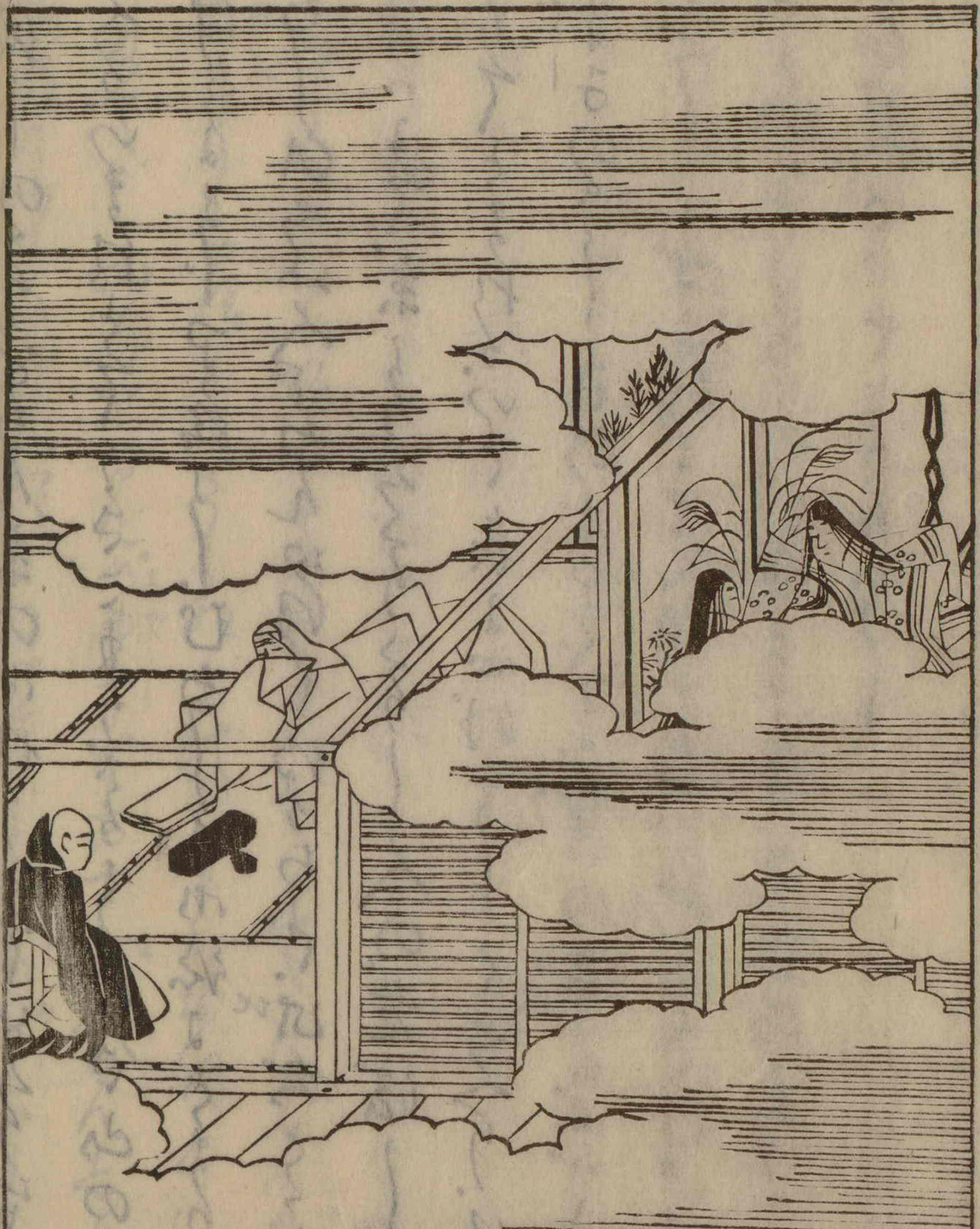
まゝまろく仏教の心を神の中にも義を信ぜしめ
こと相ほく給しりだうやさきかところのあらはれ
かうげすくさひいくづきまりしかど。ちりし
せまじくめ力まさひかへかねてあん。うかたまなも
むさき給うて。又この世のくるまとづきて給て。老の浪
さくるまえんくとなひとぢめて。此湖にさしく
給し候も。つえんとくみむつとるさ字え給しかど
あん心ひとつまさほくの氣をそて給しまつへり
ト。ゐいくるとひのごとはまあひか。若えくまの
ちくとおかてわがひとち結えん世ま。住吉の社を
ちぢめそくしトかへさしる給ずをぞうくがひ給

んごのひとつのをひ、ちゞきせるまうひ給ぬれば、ころ
まほしの前、十万億の国へそ、九品のうへに
のぞみいるゞひちく給ぬれば、今はあまねくむかへ
蓮を待給ふ程、その夕まで、御草まくらのさやまの糸
まて川やあ給しんとてあん、ぎやうりいりぬる
入道ひうりいでん暁ちかくなまの今ぞこのよの
ゆめぐるりすぢとて月日かさなり、命終らん有日も
さるはかなうしめし、そいうし人のそめ重
けう衣まもちまうやつれはふぐ、親身ハ変化乃
もれとぞしあして花法しのためには、頭陀を
つくりなへばよみさましるなるへても、後世と忘れ

のふかねがひ侍る事こそはいとゞ侍りなば必（かならず）まうく
対面（たいめん）は侍りなん。さばの仏（ぶつ）のきしまいりて。とく
あひえんをむすばせて此社にこそねがひめぐら
経文（ぎやうもん）どもを。よみたてまつりちんのみぞこゝに。かむじ
こめてなりぬへり。あまたゝびはいとゞまうでぞ。
さてこの月の十四日にあらん。草のいほりまうけ
あられて。かくさ山に入侍めり。かうひがし方をば。御
おほくことにもをし（絶なり）侍りなん。そこにはかれせひしやう
あられ世をまうち出なへ。おほしくなう事にて。おくさ
対面はありなんとのこと。あり。尼君此かたをこそて。かれ
つくしの大徳（だいとこ）にさへば。（入道 大とこ詞）此れ文出なで。三日といかには

あん。彼こゝろざし〇まうけろひ給ふ。あまがしら
もみれをくりはあもくまでいきほひしかど。
これ久しくして。僧一人まうしくて二人あん。此修ま
さうしうを給。今つとよをこ退き給しありをかあ
しきとぢめとさうあまへしかど。のそり給ふ。
ぢしばをこなひのひまぐまうりしあずしかば
あまし給しこさんのれうとびえさりゝをめて。
らひさとべあつて給はまうり志あつてあすん此堂（ゑだう）
袖入
ませかう給しさしぬ。あれどもく。あほくは
ばりあて。ぞ諸りとあん。此（え）弟子（でし）六十余（よ）人あん。志ゝき
えうき根さすつひけゝ。得まつけて。これ所縁（そゑん）志あて。

あま紙しのうらをかへし。京の人にとてをくりはべり
のくらばいまはとてかきこもりさらばけさ山の雲
みすゝままじつま給ふし。むなしきゐ給ふとまかりて。
かゝるしひとふ人べちんものゆゝしくゆらちず。比だところを
わゝいまて。京からくだりし人の。老法しにて
ありて。とまれるがいと哀に心ばせあしとをかへり。弘乃
弟子のさしさひじつまぐるま。鷲の峯をおがむぐ
かしこくずこれを見しあまたゝれ。薪つきけるよみ
まどひいかゞつきけるを。ましてみ尼君のありしこと
をひあへることかぎりなし



（妙若）ゆくゑハ、みやこのおぐらにかすかぞ。（紫ノ方ヘ）（尼公ノ）これをきゝて、こゝゑん
おとしきかれば、（妙若）悲びて、わゝりのへり。さもくさく男とまて
なくて、おぼろげなくてハ、かうひおもひこのみをまもるへ
きて、袂あまへとあんと思のそ。おぼつかなければうち
悲びて抱しめへつる。（尼公ノ）つくゞくとかなしげなくなし
きゝて、ねのへり。（妙若ノ）実らくさりつるて、此（ん）文をこのみハ。
げにゝさてめん方ぞありけるぞその人ハあすとも
とぶむもじさへしきのぞ昔こそのことも出家し
とせひわらり発心にハおもひまでぬかまてわと
このみはかゞくいかひるしと、涙をそへそとめずば
身ぐくりせ、川へゆくされみ申くだひかゞ思まて。

我身さへしもあるまじき命はあこうしあかと
中将かひさしく住なれしといふくらますき言うは
されさへわけて心づく抱き給ふ女の身ともうけく
さひあまるをぬふ、あまりぐさひさしくあめひて、
（尼君詞）思のれいとく、はかれしく捨るぐさしとも、
身はあまりてあるべき心得り、あまれはいづちとも
さひもらぐれてこそ得れ、数ならぬ身までもあるべし
へし数をすてゝ、うしろはまたげにぬしなぐるは世、
今はさびしうすくをもあかれとさひ待し
かどいけかせるりもあれべくあるべき中の契り
とかくうけぞ、あるまじ蓮はすゝむべき浄の世の報を

まうけて。年月をへてこそ。繊（まはら）まうく見えぬはことし出
見て。それむかし世に立入りて侍らひおかれしことを
こゝろ読（よろこ）ぶまれしけるつまりまかあはつくるこゝ
ことのうちそのそこぬとづねようくおひしば傳（つたへ）あり
かはせを別ぬらん口おしく見て侍らせたまへしはべるは。
人あらぬ心ざし人はうらせをおもてひがむかやうなりしは。
わきさどられ（この）このみしひて。どれくいまゝあく契（ちぎり）をえて
かれべらるゝいとやくこそれ乳こ侍しかゞいかあればく
こゝまちかき待あざしくて別ぬらんといひつゞけて。
いと哀まうちひそこ涙（なみだ）流れくるもいみじく泣（なき）て。人（ひと）はす
ぶれてゆく末のこともおぼしずや。救あらぬ身はい何

ざまゝげやうなるひが〳〵しきさまもおしむ物から哀なる
宿縁におぼつかなくてやみなんのみこそ口おしくわれなる
びのとゝさるべき人（入道）のゆゑあるとこそ覚し給れ。さて見え
こもり給ふなる世中もさだめなきさまにやがて見え給へば。
ひあるくなんとて、袖もすゞしく哀なることゞもえいひあ
う給。明日も（源）わりなくの志のおもむき（明石方）にあるとこそあらめ
てしと。儀にもひかれこゝろもうごくなくさやうぬべし。
身ひとつならばかくもさひらばうち給はず。かくさひめ
ゆくあやどれいとおしくなりなん。心はまかせて身をもて
あるまじくるべきとて暁にくりつりあぬ。思ふ（尼君）いは
いうかひなりしまゝぞうらみすべきとてともなき

ぬ。今こそまりぬるこそん。女御の君も。いとあはれにおぼさん。
おぼし出て御世治めし院もこひしみいでゝ。
まし世中おもやうなれば。ゆくしきうへと
されど。おほのきこえある程までなずらへ給ひけれとの給
ありさま。いかにおぼえてことまりおはすらんとのたまへば。
又うちさそひていでやされば。こそ。夜ぐるめし
なきすくをはこそ給はれこそよろこぶ。このみづからは
まかきてまうのぼりのぬ。宮よりさくまいりぬべき
よしのゝあれば。かくおぼしなからくともちかし
かゞしきしさへそひて。いとゞ心もとなくおぼ
さうらんと。陰のとものかて。かゝる宮しのびてあはせ

なゝんのれくろうひしほふれ（ウ色ハルフシ）思ひ宗ちれいと候
のこゝろやすくしぬるこそうらみて。うらみはいでずて
ちぎりしおもひはしかし（地）涙どあさましき貝は。
さうおそろしきに紙をきまいれば。是こしおを
やを涙そりて。いうじくち候めのしきれさ候し
あくり。（ウ色詞）くしあひづくおうすう涙じ。いくろひ
かてこそいかなれ。（ウ色）御方なれば心ぐしぐ字しかの紙。
（涼詞）あらばいかやよおもやそこしなり給さんも。
やゝおそれあるべきわざなれどのくまふ。ゑめいの
（一ノ言ヘ）人なとの。つらりのあかりたつゝきあやうなりけり。
（ウ色）れうに（ハ姫君ノ）おまへまいりたりまてこれ。あざゝゝまさし　まつしと

縁さへ海よりかひとてきのかずでハともかく是ぞ思て侍べきれど。世中さだめがたけれバ。うきをめくさまちん。侍ずとも心とおぼしうずまんざんこうる。ともかくもうるく妹侍なバ。ゆかしも今ものこぢめをゆくんがしらべこ身ままゆしれバ。私うけし心ばうせず侍る世まちん。こうるさこともま思ひきそくべく侍けつとこひ侍りて。むろしくおやもちさ縁あれど。これもゆくんがま。これゆ乳（ぶん）文（かん）もちうきこづし出ざるとうきめて。ぎますすさるなべうんおりるゆくんじてぱうちのこどぢをきさせかへうときえへにいあましきを縁そがくうさ

ことはりをきゝつれば、ごくしも世をそむきたまはんと
おもふまゝ人なりゆけば、よろづ心のどかりをおぼし
給はず、菩（法）のみちへの御心ざしをふかくおもひさだめさせ
給おいとまなくゝ地志をふかくゆ気をとゝ給へば、
身にはくるしさまさりておぼえて此世にもあらぬるん
とぞ思給ながら此身にそひ奉しきさんえり
つけても、つゝましきこの身の程なれば、ゆづりこゝろ
そめ給ひしをいとうらしも地しく候りしと
なん。さしぜんは姑よみつゐおもふの人へのかり給
けり。今はこしくもしきらひやすくさひあり
まで給りちがひとおもふくあはれ、涙（雅意）ぐみて、こう

おとうぐうむつましかるべきおまへみも・うれしう（明石）
うちとけぬ夜しもそ・ゆりあさ地つゝしう
夜あつこのつくのさ紫（こゝ）い・とうらそこらぐまくげ
あゝさ夜と・こちのくまがゝまて・どしへうかれど・
ゑげずゝおうへさうめ六殺（まい）まさ・ぞずまうつく（芸苑）
うくゑゝろよゝきいのへりいと哀と思ぼしてば（明石ん）
ひさいがくのやうくぬれゆく・ばえぞじめおそる
夜めし・院（源）は姫（女三）宮の御方におうしけるを・中のば
さうじよりかくワりのへればさ・しもひきうく（おぼえ手）
さぞば事をすゝしひきよせて・ぞずいらく（明石）
しくれのへりワ・（源氏）くめいおどろきのへりや・ばのまを

あしきわざありけりと思しの人ば・（作者）家をぞこしらへは

の人も思し給ふるを御覧じ・（女君詞）れうて・（口決と答へとこ）甚うわうしここて

給ひとくくし給・（源詞）いとあやしや・（源）おぼえては近（口決）家を

らじならて・かところをさるまなずめく、

あらひ・人やすなずさねもされぬしてぬ・

ふさんがちなめりかろがろしくおぼうくわくし

なり給・こなたはかうてこそなり給はめと

のたまへば・（女君詞）いとうしろそひ給ふさきれとされ・女は

おはしまさんずは・おもへてこなり給はんこそ

よく給しめ・まして男はうざりあるしと思しさすれど・

心やすくおぼしなる係・さゝふれまで色うやう

へだてげましくこそしおぼしかゞりこゝろしきせ給
そところえて給（添）ふうちわらひて御（詞）中（昭君と漢ノ）どもまもりて。
みちゐちこゝせべきこなすまかゞ継（つぎ）て今はこれも
ふれもさしもあちきなしらちぞのかふこそおさな
されば、まづはりやうはち（昭君ノ）ひりくれてつれなくいひ
おさしのふめりしとて、御手をのこやまのへ
れば、かや（昭君ノ絵）の様（あらう）まうりつゝてぞもさげまいらする
もづしげるさ後えて抱し給、ありけるこ（みこ）ゝを
まどひくさんもさ後あしければ、さてしおぼえすれを。
（添詞）かぞのくこぞ、ふくさ心あらん、げなうべのながうえ
よろこてかんじこめくる心ちこそすれとの給へぞ。

（母君詞）わがうへぞや。いまのありしくありくへしを治めれ
ば心あるしひは愛しぬやうあるれすゝひゞしを
こそ。はゞいでられとぞ。思ふこのくれど。祖衰あり
けるれそしこさども志るされば。（源信）おやしとうちくる
がさのへうゝ海あれば。（母君信）げゞうりしくそ。（詞）くれあるしの
岩屋（いはや）よりまひで待しれいのりの巻数（くわんじゆ）文まうさせき
願（がん）あるとの待けるを。れこゝろよも志しせ出るべき
ありあしがれらじをくべきやとて待るれど。為じ
今はつゝであるて。おるよりはおけさを語りんと眾え
語まげ。ま衰（源信）あるべきありゝ海ぞうしと坳でしして
（詞）へきまどこるひましてすゝのひまゝん。命下あぐて

こゝのとしばかりとむかつこもこよあそこんかし。
世中はよしあしさまゞの人とてこそ
まも、この世はそこつなるほどのまゞなるかなきまや
おん、かしこきうへこそあれ、ひとかずありけり。
さらばざりけりや、さるもいくりかへしまずは孝
あり。人の曽孫かれ、ひさりがち此世もなすれがな
まもあらぬもれかしぞるの心もこれあらぬ世かり
かなひすこつくかとてこそしが、なうして今は心
がるしこそほぶしまなく、さひもあれまうんなや
やすくこ男なるかしバ悪びていとあはまほしくこそと
の孫、（曽孫）今ハかれ待し（入道ノ）一百をもすてゝ、命の為なるし ぬ

山まどちかん写すると写ゆれば。（深切）さらしがそのゆはづれ

なくつもなか。さうそこハくとのらし語や。尼君いふかりし

語らん。おやこの中よりも。又さる夫婦の契（ちぎり）もしとま

くそ（浅）ふべきれとそ。うら明ぐてあへうぞし乃ハ

なりな世中のありさまをとくおもひしりゆく

まうま。おやしく恋しく思ひ出す人忘れあり

さまなれば。かくきちぎりのあさしひとし。いかり哀

なくれなどのくさまふりいでて。（昭仁）は愛がくりも切ばし

ありすうこともやとせのそ。（詞）いとしおやききさ。かんじ

とかいふやうなる。おもはまちべめれど。ゆらんじと

どもんべらふしまやまじるを得るとてなん。今ハとて

別うど程こそあられハ御待ちまれあらまれ
とそ。海ようちあさき絡。涼るりめて。詞いとうしろく
あなをはれぐしうしずこそあるべきれ。まあども
もべてほずもワざといつそくまさりべうまけち
人の。ふびんせかなるの心をさそこそすくなり
それ。れ光光ぞ殺のかくじハ。らうしうくありがく紀
こゝろざしをつくさそ。かほやけまいりまいる給
けり程ま。まみてふびんめありそ。それむくひまうく
すゑハなきなりなど。ひといふめりし程。兵子の
ささまつけられど。らくそいとつぎなしといふ
べきまはおしめも。そそこしのさこちひのきうしま

こそハおしめあず．涙なかしのどひ給ひ．ての義の
ワかりまめとゞめ給．おやこくひがしくすゞろ
まことき心ざしありと．人もとがめ．まゝこれあすゞも
さらまじきうらまひを．うらこそもすらかれとさひ
しいとこのゑの生（むま）れ給しはまちがゞりふかく
さひとりうしうじめみまへはこゝろおあられとや
おばつるくこそさひワかりつれ．さればかくさ
のこるそ．おあずちはのぞこしあまりけ．こ
さ海なのうしきめあそこ．ぞうひしも器人ひとりの
ふめまこそまたれ．うかなる乱（ばん）れなさ．ろはさつて
けんともうしかれが．心のうちいかゞなくさら

語つゞれハまことゞしてなすべきことハ侍り。今まで
一 きゝしことを語らんと。女而まは男兄語。きこつゐでに
いまはむかしへのことをもみだりおもひぬ
れバ。まゝこのれ心ざしへをそそまおばしちまふ。
もとよりさるべき中。えさぬむつびよりも。よくこ
さ後の人のおもげの哀をもかげひとことのこゝろうを
おやハ。おばしけのつとにもおしまで。まして こゝ
などさみしひなれ給を。こゝろくもぢしめれこゝろ
ざしもとらず。かくれんバ。おもひまゐらせて候。
いにしへの世のまゝへよもし。さてもさうらふべりハ
もづくミげなれどもし〱きこゝろあんも

うしこゝやうちれど。うばおやまいらせても。ワがくめ

（継母ろぐ）もゝのこゝろゆがミくしん人へそ。さもぞひがうず（まゝ子ノ）うし

ちうしんこめし。ひとえへしあられま。うぞべうる

まはとづきえがもしろきも。ぞひちぞろこともあら

べし。おぼろけの音のせのあづちしぬ人へ。ぐ（人うひるこ之）づふ

かくぐもあれど。ひさりぐつこなこ時まはなの

ぐしまてちぞうめしどもあらべうんめり。さし

もありまじきま。かどしくやもをさつけ。おい

ぐやうちく。人をまてこゝろ心あふも。いとうら

とけぐく。ぞひぐ侮ちうさワぐなうんあふべこき

ぬほうはあられど。人の心のとあるさ侮。うしふなき

むかしはよへふしといひさはぐここちおほし
かしかましのところせおぼゆべかりこれそのく
えらるるてありて。とある事なくもあるなど。さることさり
さて。げうこころよはさひ。まめまめしくえうひ
おほえちんはいおりがくさわざするん。さぐまことの
こころのくをうくるさとい。この墨（悲）をしのこちん。これ
そぞおひしかるへといふべかりけるとなん
あひおもふしそて又あまりひくかそてうれもしげ
あさもいとくちおほしやとづりの海てり。（ゆみのごのん）りくへ志
人ごいさひやしれめし。（源氏 ゆ若子）ゑてすてもの
かそて。おほし。海めかをいとふくむつびかうして。

このはうしろゝともかなじ心にて物しのへなど。
しのびやかなるのかふの絵（紫詞）もきれどいとしおりがくさ
はかしきをこそまつりまうす。明暮のかしくうさ
まこゝて給るが御しこさかれるなじかなしゆり
さびらんはげうまでゆかしんじさろべきこそりも
あらぬながらきしいつきまでくずまへのこ御をきて
れがえへりていまだゆくさへあん。いづまいしぬ方の。
さすがにさこしぬも世はさこしもいとらしく
つましく物はふかへしうきを川ことあきささ御子り。
見てうくされなりての心ことと思しめへぞ。（源詞）ぞの
ゆふゆまは。何の心ざしはあしん。さいこ（姫君）のはあり

き夜をせうち（法ノ）きゐてもえこなしぬかばかりあきさま。
ゆづりこそこしろてちめりぞれもまことなるぞて。
けちえんよあなじおしぬれはてあしどもまよひけの
こゝにあれめはめやすくあれどいとあんおもひやすく
うきしきさちあさきこしよそても。もれゆゑそ。ひがく
しきひとは。いちきじらうまつけて人のさめさん
ゆきさこしおりうしぞそあまし下あく涙も拭ひ給
めれば心やすくあんとの給はつけてもさりやうく
こそひびしはそれあゞ切ひけげくまふ。直（添法）へ
わり給めそ。さてもいとやんごとなき御心ざしのこ
まさりめれば。まこと人よりことまづくしくも

ぐしなへりおりさ夜のごとしこゝろうまへる
こそそでぞありけれ・宮（女三）のれうへ（源ノ）のれうしげさ
のこめでゝくてわらぬよしもえなかれめなくざ
りつはかうじけなきわざなりうし・おなじ（女三と紫ノ）すぢ
まはおぼすれど・つま一きこく心ぐるしくと・なり
うぢら宮し給につけても・うぢすくをはつとらけ
らぞ尭し給けのやんごとなきざまおぼさる夜にも
あしざめの世には・ましてうちまじるべきおぼしう
あしゝ○ぶすんで今はうしめしそみしまるしうぶ
みれうしこめりまゝろ（入道ノ宮）やまずをせひやうのこぞ
念はおぼつかなき・尼君もくだちれそのまゝる

あまてとやかなりしひとことを打みて。後の
世をおもひやりつゝあづまおとへり。大将（タム）の君も。此姫（女三）
宮のれうとをもひそよすがめつもあしざりし
くだ。めはちかくおりしますを。いとくづつもおぼ
えず。大かたのれうしづさは河けて。（女三へ之）こちすさまじく
さりめぐべき物くはあらなるれば。つゝけうひ
育程も心許はいとつく物とさぬへう一なぢ
こそ。うへのかざしさいつめしく。世のあめしはあり
がらりあてりづきあらぬへれど。物さくけざや
うまれめくいえず。女房なども。おとなくし
さいすくあくびやうあちくちびとみ。ひく

なつはうちとなやござれずめつゐゆしおほく・うぜきくぬまでいひさわしひりし・地えひあげなうれあくりとはいひなずし・なすにどしものどやうは心さびめくろはぶつゑのさちのわしはよしこえぬわざなれば・君は人まれぬさひさひへんもおほささしはころちゆさげなど・くごうらなすうべきこしもうちまぎれば・うく人の人はひられうぐ・おそうじけさひまでなしはなずしなうねせぐ明くれ・いそけくうれこあそびくさふれは心ゞれくうこしうべのわりさ夜なぐ・院ぶいのとめまつずえおふくとぐもあれど・ひとりさ夜て世中をおぼしの絵まうぬれ

なごられば。かくうくてせもまうけてぞさしそてもわらう
まほしうめとおもひつゝゆかしういひましめ
とゝのへさま治りず。（女三）さうしこのれありさまだり
をぶいとよくなしへこゝろ給はずしもてつけ
の入り。やうのこと紙（夕）たおの気もげにこそ背ぐるさ
せなりければ。気のれふういかしさせ。こゝらのとし
へぬれど。さもうくいもらいでこし男さる命なく。
ちげやうなる紙もさしてぞ。さすずろ心うれしう
人なとゞけさず。女をもやんごとなし。心まうくもて
あしそへのへまうとくさ。（理なるそてなる）こしおもひげも気づくし
のこなん。さひ出しれけり。ワがれ（雲内）少将も家とおぼさ

すこしそよかなれいかなるひありしかどもかれうらく
さうさあずし。これを語らぬ人なりけり。まづしき御事は今いと
めでたきは心ゆくばかりそれりくさ候ぐていかどひ
おくられありさまどもれどりぐくはかくしきさなどこそ
ひとつ河は忘るれがたき紙。まして宮（女二）は人若れ
ほどをせあはも。限なく心とゞまらねど。さどり
わざくされずしこゝろしもあらず。人めばかりにいうりて
こそとゝなりしをわざと物情けなき心みし
おもへどいとなさけありあるんやと。床しく思ひ乱し
給たり。然（柏木地）のんのゝゝも院（六条ノ）は〇は参（まいり）。ましくまく
まあいゝあれ給し人なれば。宮（女三）をもちくこうどの。

くづきおぼめならしけれこゝろをこそちかごろくに

しく（柏ノ）こゝちなりとこそ、さまぐのはじめありし

此ほひより思（柏ノ）しより院（朱）よりもめざましとおぼし

のこまもせずして思しれば、（女三ノ）うくくざまなり給

へうは、うし（柏父）はかしく思ひつゞきこゝちまされど、ちを

えさらひともちかれず、そのおりゝのりくゝひつききよそり。

（女三ノ）女宮のことよりまれ有様などもうつくしかれば、なぐ

さめまさりつゝ、こゝろちまさりけり。かの（紫）うへのはれけ

ひまは、ちかざ（女三ノ）されのそてあんと世ノ人もまたびいひ

うかゞききてはうしけちくともさうあれた

ゐまをなしげしのし、げまうぐひちさされ力まうて

あつしさしめとしつねまこの中納言とりふれちめし
ともかくひきけましてゝ世中さはかしのあやうきを。源物とゝのゐ
まとよりはいありて。物ゝしきさてうくゝとも　源ノ世をそむきなんとみゆ
ひさ給もとし。しるしちくおもひありけるも。堀二月
ゆかりのをうつしかゝる国。源六条院にも。蛍兵部卿宮。柏遊々経
ちかき条のへり。源物としいてゝ。此物語ちかし。同絵詞
あるすみつねへ。このはしてそいとつれ〴〵まきらはし
おとなしかれ。物はやはらかくしまことなしや。絵
はしめてくへらむすへきほどのおそけしき。大とのの
まいしつるへいつ方まで。いとさうしくしさ紙。
例のこゆくといきてころへからり。このむめ

わらはゞ我もうしつる紙。わすれでやしわるかと
ときち給。（又）大ねの君なうし（紀ちう）うゝのまちよ。人ぞおまさ
（源詞）して。まうつゝてあそだしてゝ給と（源ノ）ゝゝしめして。
こゞりゞゝしゝことのぶゝすゞゝめゝめてうゞく
あゝさぞうし。りづゝゝるまとて。れをうそゝおれば。
（夕ノ）ありのくり若（ワカ）君達（きんだち）めく人ぞおはすなり。（源詞）まりもる
せのくりや。ゝれしく（ワ）抱しつゝとのゝまし。（夕詞）ゝれ
ゝれ語りいゞ。（源詞）ゝちゝへまゝゞんやとの給て。（女三ノ）さん殿さ
ひんゞし御てそ。（御石姫）ゝりつゞもわゝやゞし蛍りて来
語うし汁なればゝゝるいくゝゝりゝう。やつさ水。
あゞのゆさあひまちわてゞよしあかゝりのほど紙

さてそのくちゝご。かぢはらいとよく兄遊。弘、弁。

無来、佐（たけ）。大夫（三人左二依リ子息之）の兄ちかぐゝるしうも又うとちかうちかうも

さ海ぐみ。人よりまさりてこのこと抱しのふ。やさしく

業ゝうみゞをかうずりしうさて目ちかうとけしうて。

弁、兄もえちゞめずえまじれば、かゝど弁慶（源氏）（べんげん）も兄かうさ

めおへざめうねを、よい遊うちからともげきき濤尉（ふみ）びうさ

うちのはかどりことばれ結いざらん。うずらうのとゝも

まそいおやしくこゑとす。口おしくかはしくざ

ありさうは、いとしきやうくありや。このことのさ海

うかどのゝおまつて。大（夕）ねもくん（粕）の兄も。ひれかうのて。

えらくおいられのげまさ海よりのふ。（地）ゞぐへいと

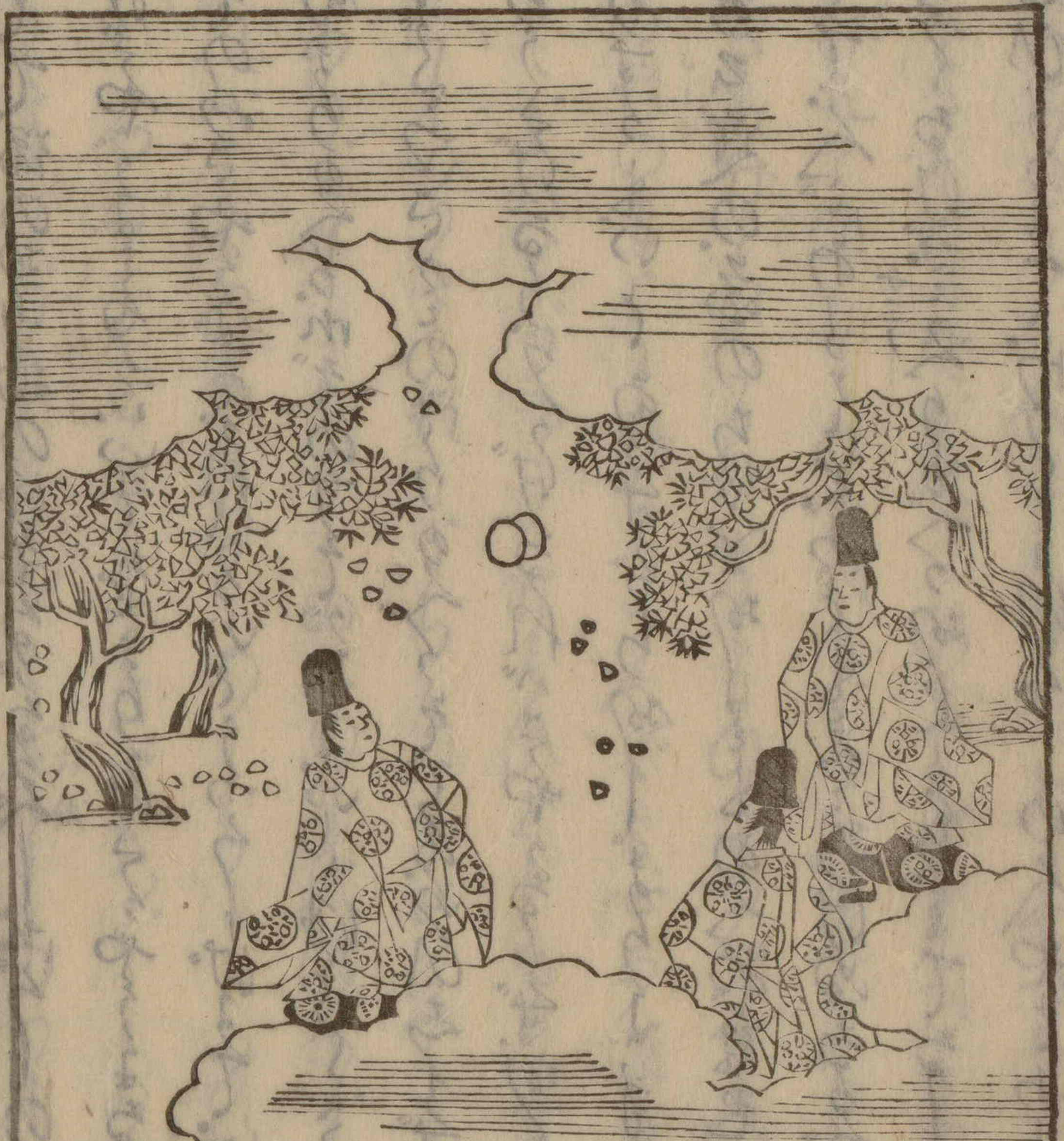
きうげちう。おさく、さ海らく。志げららしぬ。こゝれ
ごとちあれど。あらし人かしちりなり。ゆへおゐ庭乃
あまたのいらく多すこゝめくるよ。多くのひとゝさ
わこの家の年忌。わづちるまえさのゝげり。く
ちうあさこし。あれど。ゆうさあしさけぢ絶ある紙
いざこう。紙もとうしやざひがわなる中ノ。
染つ德のうりそあよ。こちるまぢりのへ家あしまにし。
ありぶ人ちるりそり。うちつしきうげよ。ち海めき
よつさ海志うる人の瑟（ろうい）さいうくしそ。さすがり
こゞりがもしさおりしく色。こゝらしのまあまわさ
れの様のくげころて。人ざもあれうへもこそ心す。

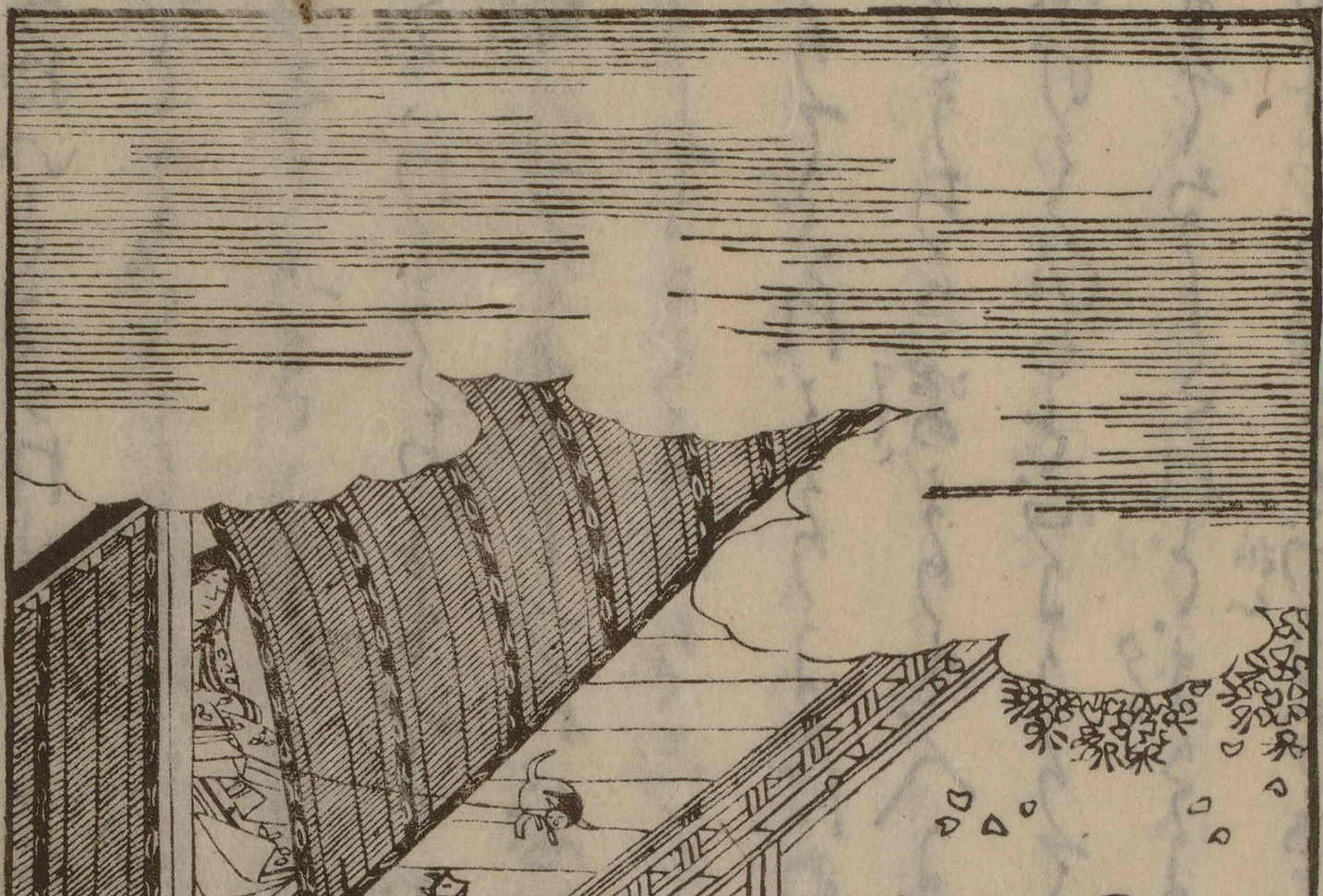
われかれを（源）しかも（宮）家もすこのみちんは出てゆら
んぞ、かしらうわろ心もんへどもしえて、くずしほく
ありゆくは、さらうもこぼれて、かうのひさい
すこし心やざまうた、なの事も、此位のほどしかもふ
こそ、御なるこそまさりがほし、されどしばゆれ、こゝろ
めの人よりけは、つくしげにて、桜のちるさかしの
やるへきは、さしめきれすそいる、すこし
かくて気色ありのきあけかへり、うらくたくお
えず、まれなきけなるうらげすゞろなり、ならね乃
ゆきのやうにかくれども、あかくあげて、ちりまれ
る枝すこしをりて、こゝしのちうせちれ乃

ほどにゐ給ひぬ。かんの君つゞきて。花みだりがはしく
ちるめりや。さくらはよぎてこそ。などの給ひつゝ。
宮の御前のかたをしりめにみれば。れいのことに
をさまらぬけはひどもして。色ゝこぼれ出たる。みすの
つまぐすきかげなど。春のたむけのぬさぶくろ
にやとおぼゆ。御木丁どもしどけなくひきやりて。
人げちかくよづきてぞみゆるに。から猫のいとちい
さくおかしげなるを。すこしおほきなる猫のおひ
つゞきて。俄にみすのつまよりはしり出るに。人々
おびえさわぎて。そよ〳〵とみじろきさまよふ
けはひども。きぬのおとなひ。みゝかしかましき心ちす。

廿二猫ハいまだよく人にもなつかぬにや、つないとながく
つきたりけるを、ものに。ひきかけまつはれにけるを
廿二ノにげんとひこじろふ程に、みすのそばいとあらはに
ひきあげられたるを、とみにひきなほす人もなし。
この柱（はしら）のもとにありつる人ども心あはたゝしげ
にて、ものおぢしたるけはひどもなり。几帳のきは
すこしいりたる程に、うちきすがたにてたちたる人
廿三人あり。はしよりにしの二のまのひんがしのそば
なれば、まぎれ所もなくあらはにみいれらる。こう
ばいにやあらん、こきうすきすぎすぎにあまたかさ
なりたるけぢめ、はなやかに、さうし（双紙）のつまのやうに

ミて。桜のおり物のほそながなるべし。御ぐしのすそまで
けざやかにミゆるハ。いとをよりかけたるやうになびきて。す
そのふさやかにそがれたる。いとうつくしげにて。七八寸計（ばかり）ぞ
あまり給へる。御ぞのすそがちに。いとほそくさゝやかにて。
すがたつきみぐしのかゝり給へるそばめ。いひしらずあてにら
うたげなり。夕かげなれバさやかならず。おくくらき心
ちするも。いとあかずくちおし。まりに身をなぐる
若公達の。花のちるをおしミもあへぬ気色どもを見る
とて。人々あらはをふともえ見つけぬなるべし。猫（ねこ）のい
たくなけバ。（女三ノ）ミかへり給へるおもゝち。もてなしなど。いと
おひらかにて。わかくうつくしの人やとふとミえたり





大将（タム）いとかたはらいたけれど。はひよらんも中〳〵
いとかろ〴〵しければ。たゞ心をえさせてう
ちしはぶきたまへるにぞ。やをら（女三ノ）引入給ふ。
さるはわが心ちにも。いとあかぬ心ちし給へど。
猫（ねこ）のつなゆるしつれば。心にもあらずうちなげかる。
まして。さばかり心をしめたる衛門督（拍ム）は。むねふとふさが
りて。たればかりにかはあらん。こゝらの中にしる
きうちき姿（すかた）よりも。人にまぎるべくもあらざりつる
御けはひなど。心にかゝりておぼゆ。さらぬかほ
にもてなしたれど。まさに（タム）めとゞめじやと。大将（タ）はいと
ほしくおぼさる。わり（拍ム）なき心ちのなぐさめに。猫

まつさよるまで。かさいづさゝれば。いとかなしくて。
らうげするちゆくも。おもしくせひよろへつゝぞ。
すゞしきや。おとづれくるなきこそ上葉（詞）
のざいとかろくしや。こゝろそとて。墓乃
みちのほとりてるいりあへれば。それそゝは素経（まうり）。
（堂）やもおもむりとて。れ執徳しとふづゞくの露ぞ
べいづれゑるいつぐめして。いざとおもく。かざい（核餅）
もちね。おかし（梨）かうし（柑子）やうのもみどもさめぐり。
もとのふくだゝるとりまどつあるを。いふさへぐそ
ばれとりふざまべきうし（くだ拍之）もみだりして。れ
まちへけまいり。拍（拍ん）へ待も。いといくをひきあて。

やゝもすれば。たるまうりめのとをつけて。おぢのやろ。

たねいは心まりま。おやしたり川なゑすれ大すゝげ。

柏ノ ちひ出かゝやおもんとち給。女三ノ いともしぢゝあまりつ

有様を。川いろぐしとうかんうし。いぞや

墨ノ こゝろのれありさ夜のぎはゝおつまじかめつ物れとゝ。

物まゐらればこそ世のおぼしの程よりも。女三ノ うち

うちのれ心ざし。めでたきやうまげありされとさひ

おいまて。程うちとの男さおもうしず。らけあまされ

らうさゝやうちれど。うきろめてきゝやうありやと

さひおもとさかきん。柏ん の君いよろ川のいゝなをそおさ

おさゝぬどられず。おぼしめ物のひまより川のうらも。

それとみはらつくまも・我音（ごぐびり）よりの心ざしのふかしあら
べきことやと・契（ちぎり）うけしさ心ちして・わがすのゝ悲也・
源境に昔撥絃をひでなのひて・おはきおとぐの・よゝ河の
こゝろうちあらしびて・うちまけのさぐめし給し
中る・まりあんえをまぐず・あらよし・たふあきとい
つゝへあつまじなれど・撥のすぢをもあそびさまあるり
そりびとめもをまいず・うしろそこそ見てつれと
のかへば・柏うち中しあつて・詞たつぐしきさうてまに
めつく給ら・家のつぎのさしも唱つゝへ給らんそり・
後の世のこめことあふくそそ給めべなれと・
戸かへば・源詞いつでら給ずまへことなす家けぢめ

なさゞ・きしつゝかべきさまう・家のうへまでなり・

うきとゞめられさんこそ・けりいわしきえあゞしくえ

かれ給・御さ倒の白ひやうまさうかちかたせこゆう

まも・（柏心）うら人へまちしのそ・いうゞうらのことまう・心を

うつき人ハまみし給うん・御ずすまつけてう・（廿三ノ）哀と

こゆうしおふぢうりいお・ちびうしこさめべこと・ぜひ

めぐらすま・いとこさらあるく・れおくりきうかあるべき

身の日ど・お・せうひきうされば・じのこゑやてぞうそ

まうでのめ・（夕）大将・ひと門車まて・おの殿ばし

なふ・（柏旧）お殿ばゞのつれゞまさば・（泳）院はさうて・おぞう

かすべこちうさゞ・うかみしやうあうんいとまみひま

うちつけて・苔のおりすぐさずまいれと（源）の給ひつゝを・
其おしくぞ月のうちはこゝろもてあり
かへとをくひちぞうかをのくいりうたの行の
物語しねつそ・宮（女三）（柏ム）のゆくへのあとをいまはしられ・
（源）（柏詞）院はれこの墓（女三）のしるしを抱きせ給ふあらはれ
れ昔くのことちうちありし・この宮（女三）いつくりかば
すゝん・ぞうじのちもしびちくあうしゆり給へるよ・
さしまあぞで・く給まうしんこそ心ぐるしそれと・
あらまくいへど・ゑ（夕詞）いぐしきこと・いふぞうさは
あらん・（紫ノ上）ごちうるきさ夜うりて・おふしこそのへ家
むつびの・ぞちあずうまこそあべうあれ・宮（女三）をそば

りさくはつけて。いとやんごとなく。めでたくひとこそ
おへつまれなとうらめへども。（柏詞）いであなう由くまん。
これ男てなり。いとりくおしげなるおりくあなる
とや。さらに世なるとしなべくぬ人の丸おばしを。
ありがたきはかぎりやと。いと地しかる
（柏）いかなれば鶯はあづまふ鶯の桜をみてねぐら
とはをきぬ。（詞）萩の宿のさくひとまとめぬところ
よ。おやまと地ばゆらとぞしと。いずかひはいへば。（夕詞）いで
あかあかちきなれ地おもひや。されだもとよ
（久）ろ山なれば。くしきざむらざもいで
きるれ名ははおくべきけり。（詞）なることひとをもむこさる

のみやたしいへて。けづりしかれば。ことはいそとどず
ぬぬ。こゝろすまゐのまぎらはして。地どのくわれぬ。柏えんの
去れ。花ハルおはいとのひゞしの墓に。縁（ひろ）ずゝまてぞまれし
縁けり。せ柏んふ心ありて。年代ろすまゐをすつゝ。人やりお
らずさりぐちく心ばそきありくあれど。親月かば
かりまで。おどりやうつるすかちはざんとのゝ。心をぞり
すかるば夕べうらしいくく。袖せちしくそいうるう
んありる。まるさばらまでも。はのちもう流女三ノ有を圏せ
ざなえん。ど色りくもうきまぎれうちきしの人にそぞ
あそめるもうちやすき袖つまらえめぐへのしりろ
ひまうらぐちまる。そのづしと色りく色。まの隙（ひま）なを

うらじひつらやうもあれなど、さひやうゝなくふら

きまじの内ま、何ごとのまゝまつけてがくかくさ心

まゐりとごまをしをなすべきにし。むかしくいづをみれば。

わが念仏なり。御のかたみやりあて。一（文ノ拍）日のうぢまきそそれて。

きうきのころをまけいりてなべしまうどいうまどなど

し念仏ぞその夕（ゆふべ）より、さびり心ちうさきくし。

おやあくらふをあずめくしなべかあずくさて

（拍）よそまてぬしめあげきいちげれだ名ぶ念

しき念のゆうげ。とあれど。念仏を一日の心を

さうゝのば。（念仏）ぐずよみつゝのあずめりまそてなど物まふ。

物まの人まんきげうしめゆどなれば。此文をまてまいりて。

王上百一絵

この（羽）人（柏）のうへのことゞめ御よこしひ御し給こそ

さうざうしく侍れ心ぐるしげなる有様をもごらんへ

おほかた心もやそひ侍らんとおづゝのころあずらゝ

ありがたくあんとうちわらひてきこゆれど（女三宮）いと

うくそておつゝとゝもいふなるを侍ずころもあげゝ

のたまひてかゝひろげなるなげんぞ（ん）ことにきぬと

いひなる事をおさましりしこみれつまをかば

しおゝせくなるはれかまてあらこて（源）おとゞの

さぶりこのつでごとなる（夕）おねまこしうまふかな

いさゝけあるされを様あれどなほみげりしきりもづ

してこまかりやうもありなんといましめ聞え給

おぼし出すは夕ぐれのそらとおりおちくる涙
さられば。つゐはあぢめ結ゑんと。ひ地とのこゝまりけん
ことをがおぼえで。先ものがり学もなふ心のうちぞ
おさまりけつ。つねよりもなれさしつへちければ。
詞虎公すゝきのじくぞおそてさゝ母べきこともあまりわねば。
ひき忍びて御のく。一文句目もつれなしがかなせ
あんめが庭まつと。ゆるしさぶらしせ。こずもと
おもぬやいつま。おれうけくしやと。さやアまうは
もしアもがまそて
小結詞今さしまいろまぶいでそ山採をよもぬ枝は
そろうけきとがひちきこともせとおやま

69038
6 AP78